
大切なもの～第1節～

ボロズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切なものゝ第1節

【Nコード】

N4350L

【作者名】

ボロズ

【あらすじ】

わずか30歳で亡くなった青年の物語。

彼は地球とはかけ離れた異世界に迷い込む。彼は小説で読んだような魔法とモンスターがいる世界を想像していたが、あたりでもありはずれでもあった。

彼はそんな中、一人の男に出会う。

彼は何を考え、何のために戦ったのか…。

彼の本当の伝説がここにある。

第1章第1話

「はぁ…どうしてこうなるかねえ…。」

俺の名前は火水 生。運の悪い高校生だ。今、城みたいなところにいる。

情報を頭の中で整理してみることにした。

「生、起きなさい。今 何時だと思っているの。」

「まだ、7時半じゃないか。今日は日曜日だから学校は休みだよ。せっかくなんだから寝かしてくれ。」

「何いってんの。今日はいとこの結婚式でしょ。2か月前にも言ったじゃない…。」

「おい、そんなのは聞いてないぞ。誰に言ったんだよ。」

「あっ、ごめん。あんたじゃなくて、光二君だった。」

っていうか今日は光二とカラオケに行くんじゃないかってたけ…。

「いいかげん起きなさい。今日は制服じゃなくて、あんたもスーツで行くんだから忙しいのよ。朝ごはんを食べてしまいなさい。」

母さんの名前は火水 涼子。母さんはなぜか重要な用事を人に言うのを忘れてしまう人だ。だから何か用事があるときはたいていこのようにバタバタする。

いつものことなので、朝食を食べに下に降りる。

「おはようさん。」

「おはよう、おやじ。」

親父の名前は火水 了。

自分の中では超能力者だと認識している。

「おいっ、生。」

「なんだ？」

「今日は気をつけるんだぞ。今までで一番いやな予感がしているぞ。特にお前の所から心配がしている。母さんとさやにも言っているが、おまえが一番気をつけるんだ。もう高校生だから誘拐はされな
いと思うが、常に注意しておけ。」

「俺は死ぬのか？」

「それはない。もし、そうであるとするならば、夢でおまえが死ぬ
ところを見るはずだ。」

「……。」

まあ、確かに親父が言っていることは正しいというよりは現実
に起こりうるといったほうがよい。実際に色々あった。たとえば、車
はねられて、入院した時の当日の日も

「お前、今日 事故にあうかもしれんぞ。気をつけろ。」

って言われたからな。こりゃ、何かもあるかもしれないな。気をつ
けよう。

「お兄ちゃん、おはよう。」

「おはよう。」

みんなすでに着替えている…。

「二人は今日結婚式があることを知っていたのか。」

「「あたりまえだろ（でしょ）」」

「……。」

なんで母さんはいつも俺に言うことを忘れんだろうか。そんなに俺悪いことばかりしていたか。いまいち母さんのことがわからないのはなんでだろう。これでも17年も一緒にいるんだけどね…。

まあ、いつか。ご飯ご飯。

母さんのご飯は最高。これは本当だ。実際に学校でも有名だし、ご近所とのお食事会でもいつも絶対に呼ばれるというかそれ自体が料理教室化している。いつそのこと料理教室を開いたほうがいいんじゃないかと思う。

「今日もうまいなあ。昨日の残りのハンバーグがここまでおいしいとは…。」

「むう…。お前もようやく涼子のご飯の味がわかるようになったか。見ない間に大人になったな、生。お父さんはうれしいぞ。」

「そこで判断すんなよ。もっと違うところがあるだろう。」

「お兄ちゃん、母さんのご飯ばかりじゃなくて、私のも食べてよ。彼氏に弁当作って一緒に食べたいのに…。そういえば、昨日の帰りに女の子と一緒にいなかった？ ねえねえ彼女？」

「親父もいるだろうが…。」

卵焼きが真っ黒な炭になった状態になって出てきたんだぞ。食えるか。しかもいきなり昨日のことばらすんじゃないやねえよ。朝からみんな

興奮するだろうが…。

「お前付き合ってたのか？親の承諾なしで付き合うとはなかなかやるじゃねえか。」

「そうだよ。お母さんの承諾なしではだめだよ？」

言う相手が違うだろうが。妹がよくて俺がだめなんだよ。訳わかんねえ。っていうか母さんいつからそこにいたんだ？まあ、いいや。いつものことだし、無視無視。

「名前はなんて言うんだ(の)？」

「うるさいっ。着替えてくる。」

これに着替えるのか？どうも結婚式用ではない気がするんだが…。

着替えたのはいいが、これはおかしくないか？親戚が白のタキシードっていうのはまずいというより場違いといったほうがよいか。完全に俺は空気を読めない人になってしまいううだな。まあ、自分が変わっていないとは言うことはできないが…。

「キャー、お兄ちゃん(生) かつこいい。」

「……………」

呆れて何も言うことができない。こんなコスプレをしてないで早く行かないといけないんじゃないのか。

「早く行くぞって言おうとしたんだが、生は着替えてこい。俺がもう一着買っという。それを着ていけ。後涼子、話がある。部屋に行くぞ。」

さっすが親父。わかってくれたか。よかったよ。家族に話の分かる人がいて。

俺のようやく着替えが終わり、出発ということになった。俺はどこにいくのか分かっていないんだが：

今、俺らは空港に行くためにタクシーに乗っている。家は北海道だ。よくわからないのは、親戚の人も婚約者も北海道出身でしかも職場も北海道なんだが、東京で挙式をあげたいらしい。それで親戚一同は混乱したらしい。親戚は必死に止めたんだが、二人は全く聞かなかったらしい。最近海外で挙式を上げることめずらしくないから親戚はあきらめたらしい。人は十人十色であるとうまくいったものだと思う。

「そういえば親父、親戚の人はどこの人なの？俺らとはどういう関係にあたるんだ？」

「よくわからん。」

「……………」

いいのかよ、そんなんで。

「そんだけ遠いっていうことだよ。」

「……………」

なんだかんだと言いながらもようやく空港に到着。

「さあ、みんな急ぐぞ。時間がない。後20分で出発だ。」

「おい、ギリギリだろうが。もう少し、早く出ないといけないだろうが。」

「待つのが面倒だろうが。それがわからんか？」
「……………」

やっと着いた。休める…。

やっぱりYUIは最高だな。心が癒される。みんな、そう感じているはずだ。

「ねえ、お兄ちゃん。トランプをやろうよ。」

「疲れてんだから、休ましてくれよ。」

「ふーん、そうなの。CAの女の人があるなあ。隣にいる人はお兄ちゃんんだけど、シスコンで困っているだって言おうかなあ。しかもしつこくお触りしてくるって。うん、言おう。」

「わかった。トランプをやろう。楽しそうだな。」

結局、俺は休むことができなかった。

そこから、またタクシーに乗ってホテルへ。

遠すぎだろ。そりゃそうか東京だもんな。

ホテルに到着し、チェックインして待合室へ。たくさんのお客が挨拶している。ちょっと遅れ気味ではあるが、挨拶に加わった。

「君は高校生かい？」

「はい。親戚に中年の近い人がいないもので…。」

「よかった。うちの娘が高校生なんだが、君たちと同じように年の近い人がいないもんでねえ…。じゃ、娘を呼んでくるよ。いや、こっちに来たな。」

「生！」 「玲！」

「ん？二人は友達か？」

「……ウン。トモダチダヨ。オトウサン。」

玲、片言になっているよ。

「あつ、お兄ちゃんと一緒に帰っていた人だ……。」「

親戚中どこかフロア中に聞こえたんじゃないかなあ。みんなこっちのほうを見ているぞ。こりやまずそうだ。なんか言っとかないと。

「いや、クラスが一緒でたまたま帰り道が一緒になったただけだよなあ。玲？」

「うん、そうだよ。」

「そうか。生君だったな。娘と仲良くしてやってくれ。」

ちょっと怪訝そうな顔をしているが、なんとか信じてもらえたらしい。あぶねえ。

「生、まだ時間があるから話さない？」

「わかった。さやも一緒に来い。」

「わかった。」

「生と私って、親戚になるんだね。なんか複雑…。」

「確かにこんなことは滅多にないな…。」

「……………」

世界は狭いな。付き合っている彼女と親戚になるなんて…。親父が言っていたことはこのことなんだろうか？確かに変わったことではあるが、いやなことではないと俺は思うんだが…。

「私もお兄ちゃんみたいな恋がしたい。」

「……………」

しかし、時間なので会場へ向かうことにした。挙式は何も問題なく終わり、新郎新婦は二次会へ。俺らは会場片づけ手伝いとなったが、

「ちょっと待ってくれ。生君。」

「はい？なんでしよう？」

「新郎新婦がかばんを忘れていったね。親戚はやることがあるんだが、君は重いものを持てそうだし、これを届けてから手伝ってくれないか？ホテルの外ではあるが、近いところだから。はい。これはホテル周辺の地図だよ。場所に丸をつけておいたから。」

「はい。わかりました。」

というわけでこれを届けることになった。ふつう忘れるかなあ…。

みんな宴会をしていたが、なんとか渡し終わり会場へ戻ろうとしたとき、

「ゴオオオオオオオー」

後ろを振り返ると大きな黒いブラックホールのものが……
まるで大型掃除機みたい感じた。

「くそっ、吸い込まれる。」

なんとか電柱にしがみついたが、俺の前に猫がいた。

「お前、危ないぞ。早く逃げろっ。」

しかし、猫は吸い込まれるどころか反対方向へなんの障害もないようにあるいて行つた。俺だけ吸い込まれているのか。その瞬間、気が緩んでしまったのか、手が滑つた。

「うわあああああああ——」。――

こうして、俺は吸い込まれてしまった。

何時間落ち続けるんだろうか？だが、だんだん速度が下がっていくのがわかるが、真っ暗じゃないにもできないし、落下中だし…捕まるものもないし。

と思っていたら光が見えた。

遠くではあるが、ゆっくりとその光は大きくなっていく。

そして、光が俺を包んだ。

「おい、おい、起きろ。」

その声につられて俺は目を覚ましたが、まったく知らない男だった。咄嗟に後ろに下がった。

「あんたは誰だ？」

「おいおい、いきなり逃げることないだろう。仮にも俺はお前を助けたんだぞ。まあ、混乱しているのは分かるが、もし襲うならお前

が気絶している間にやると俺は思うがな。どちらにしても、人に名前を聞くときは自分から名乗るもんだ。親から習わなかったか？」

「……俺の名前は火水 生。あんたの名前は？」

「少し硬いな。落ち着いて話そうぜ。そういえば俺の名前だったな。聞いて驚くなよ。俺の名前はスカライド・ドラゴンだ。っていうかヒスイ ショウ？どっちが名前だ？今までいろんな奴にはあつてきたが、そんな名前の奴は初めてだ。どうしてこんなところに無防備で寝ていたんだ？」

そう言われて周りを見渡してみた。確かにここは薄暗く、街灯もない。日本ではないような感じた。それにしても彼は珍妙な格好をしている。よくゲームに出てきそうな鎧を着てしかも、剣を腰に下げている。ここは危険な場所なのか？それにあのブラックホールみたいなものは一体？剣ということは外国か？しかしあんな服は日本だと江戸時代かもしれない。もっと前の服装だぞ……。

「おい、だんまりか。質問に答えろ。どんな国から来たのかは知らないが、そんな格好でここを歩くんてことはだれもやらない。しかも、俺が発見した時は寝ていた。頭がおかしいのか？それとも誰かに襲われたのか？俺は後者の真否が気になるがな。」

「気が付いたらここにいたとしか言いようがない。襲われてもいないし、ここはどこだ？それに俺は東京にいたんだ。ここはどこかの山奥か、それとも外国か？」

「トウキョー？なんだそりゃ？俺をなめてんのか。そんな地名どこにもないぞ？それに誰にも気がつかないうちにここに来ることができる奴なんか一人もない。服装にしてもお前怪しすぎるな。もしかして、暗殺者かまたは間諜か？」

「東京を知らないだっ！お前日本語をしゃべっているだろうが。」
「ニホンゴ？何をわからないことを……。俺がしゃべっている言葉はメドール語だ。それに質問しているのこっちだ。おとなしく答えろ。」

「お前が嘘をついている限り俺は答えない。」

「…………お前今の状況でそんなことがよく言えるな。剣も持っていない奴に何ができる？俺は質問に答えろと言っているんだ。嘘は言っていない。嘘を言っているのはお前だろう？」

「暗殺者でも間諜でもない。しかし、こちらも嘘は言っていない。自分が知っている国を言う。日本、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリス、ロシア、中国、タイ、ベトナム、インドネシア、オーストラリア、エジプト、エチオピア、ガーナ、カメルーン、イラン、インド、どうだ知っている国はあったか？」

「知らないな…………。どうやら嘘ではないらしい。ここでは？そう言っておこうか…国は5つしかない…。」

「…………。」

一体ここは…。自分の頭の中ではある言葉が浮かんではいるがそれを信じるのを感情が拒否しているようだ。

「心中を察するが、とりあえず俺についてこないか。町に行ったら何か思い出すかもしれないし、お前をこのままにしておくわけにはいかにないからな。どうだ？」

「…………いいのか？素性をわからない俺を信用して？」

「まあ、大丈夫だろう。それに暇つぶしにもなりそうだ。」

「わかった。ありがとう。俺の名前は生と呼んでくれ。君はなんと呼べばいい？」

「ドラゴンと呼んでくれ。ではショウ、行くぞ。これからよろしくな。」

「こちらこそ、ドラゴン。この恩はいつか必ず返す。」

「そこまでのことじゃないと思うが…。気を長くして待っているよ。」

これが彼、いやドラゴンとの出会いだった。

ドラゴンと歩くこと10分程度。あたりはいつの間にか真っ暗に近かった。そんな中、馬車が見えてきた。馬車の周りでたいまつで照らしているみたいだ。しかも馬車には幻獣のような旗がそれに施されている。これは完全に…。今の時代こんな森のようなところまで馬車で来ることは滅多にない。しかも鎧と剣を持って…。

「どうした？早く来いよ。ここは迷うと大変だぞ。て言うかもう見えているがな。お前はあれを見ても驚かないんだな。もしかしたらとは思っていたが…。」
「……………」

馬車に近づいたところで、

「ドラゴン様、何をしていたんですか。墓参りとはいえこここの場所で長く居座るのは賢明とはいえません。それに…………その男はなんですか？」

ドラゴンよりもしっかりした鎧を着ている男だった。帯剣しているし、その上槍を持っている。俺なんか一撃で殺されそうだ。

「やめろ、勘ぐるな。こいつの名前はショウ。あそこの真ん中で寝ていたんだ…いや、気絶していたといったほうがよいか。」

「お言葉ですが、その者は怪しすぎます。一緒に連れていくのですか？」

「ほっとくわけにもいくまい？それに帯剣もしていないし、大丈夫だろう。」

「わかりました。しかし、念のために身体検査をさせていただきます」

すよ。よろしいですか？ ショウ殿？」

「わかりました。」

「あまり、乱暴するなよ。」

「了解。」

「では、ショウ待っているぞ。」

それから、念いりに身体検査を受けた。

っていうか裸になって服も全部、兵士たちが触診を行った。

「何もないようだ。すまない、ショウ殿。状況が状況なもので念いりに行わせていただいた。ドラゴン様は馬車の中にいらっしゃる。あまり失礼のないようにな。」

なんか俺は勘違いをしていたらしい。ドラゴンは傭兵かなんかと思っていたが、どうも人から守られるような立場であるらしい。暗くて馬車の周りは見えなかったが、兵士は200人ぐらいいるようだ。俺はいったいどんな状況になっているのだろうか。そんなことを思いつつも、ドラゴンが中にいるといわれた馬車の扉をたたいた。

「誰だ？」

「ショウです。」

「入れ。」

中は意外と広かったが、ソファーみたいなものが二つあるだけだった。

「悪かったなショウ。そこに座れ。」

俺は素直に座った。ドラゴンのふつうの顔を見るのは今が初めてになるだろう。しかし、彼は普通の人とは違った強さを感じる。強い

て言うなら、光二の気配に近い気がする。ドラゴン：

「君はいったい何者だ？」

かぶつちやつたよ。

まあ、俺から言ったほうがいいだろうな。

「どうやら、俺は異世界から来たらしい。さっきまで否定はしていたが、確信に変わった。俺の世界では馬車にみんな乗らないし、国のえらいさんも馬車には乗ることはないと思う。これが俺の話せることのすべてだ。自分の世界のことを除けば……」

「……そうか。俺は名前を偽ってはいない。しかし、身分を名乗っていなかったな。正式に名乗るとしよう。俺は第15代メドール国王王子スカライド・ドラゴンだ。明後日からは正式に国王になる。状況の説明は明日にするとして、君は体が怪我しているということはないか？」

「いや、ないよ。」

「そうか……。あそこは父上の墓の近くでな、まあそこは公園となっているのだが、そこに君が落ちてきてな……。びっくりしたよ。息をしていたから、声をかけて起こしたんだからな。大事に至らなくてよかったな。一応、暗殺者かもしれないと思って、嘘をついたんだ。済まなかった。」

「……いや、大丈夫だ。」

「わかっていてもかもしれないが、明後日は俺の国王になる戴冠式を控えているんだ。みんな少しピリピリしているのはそのせいだ。すまん。あと、こういう風に二人のときはこの言葉遣いでかまないが、俺が上で話しているときは先ほど見たに敬語で頼む。」

「わかった。」

「話が二転三転して悪いんだが、シヨウはよくわからない人間とい

うことに認識されるだろう。まあ、異世界から来たのだからな。しかし、それだけでは済まない。今の国は派閥があつてな…もし、いやもうばれてるか…、俺と仲良くしていることが分かったら、君を使つて…」

「政治的にもしくは俺を人質みたいな感じにして、ドラゴンを傀儡化する…ということか？」

「そうだ。シヨウはもちろん俺の客人として扱う。じゃないと文無しで町で野宿になる。だから、君には護衛をおそらく四人ほどはつけることになるだろう。不便かもしれないが分かつてほしい。」

「いや、こちらは助けられているほうだ。もちろん、大丈夫だ。俺は何かやることはないのか？」

「それについてはこちらで考える。あと、注意してもらいたいののは異世界から来たことは俺ともう一人俺の親友で情報屋がいるんだが、そいつ以外にはいつてはいけない。最悪、処刑しないといけなくなる。わかったな。」

「わかった。」

「もう街につくだろう。明日、いろいろ教えることにする。今日はなれないところに来たから、疲れただろう。ご飯を食べて、寝ろ。あまり、考えすぎてもよくないからな。」

「ドラゴン様、つきました。」

「分かった。」

「先に降りろ、シヨウ。また明日会おう。」

「シヨウ殿、こちらへ。客室に案内します。その…護衛については…」

「ドラゴン様から聞いています。大丈夫ですよ。」

「そうですね…今日は準備ができていませんで、食事は部屋でお願いします。お風呂のほうは部屋についております。時間がかかりますので、早めに使用人に声をかけてください。こちらで準備をい

たしますので…。」

「わかりました。」

「こちらが客室になります。もう少ししたら、食事が出来上がると
思います。少しお待ちください。」

「すみません。食事をいただいた後にお風呂に入りたいので準備し
てもらえますか。」

「わかりました。」

さすがに護衛は付いたが、風呂やご飯中も見ているということはない
かった。

「では、何かありましたらお呼びください。扉の前にいますので…。」

「分かりました。ありがとうございます。」

っていうことだ。

親父が言ったことがあたったような気がしてきた。どちらにしても
今日は疲れているので寝ることにした。

明日は何が起こるのだろうか。

第1章第1話（後書き）

いかがでしたか？

初めての投稿ですので、何かありましたら気軽にコメントをください。

お願いいたします。

第1章第2話

とはいっても、眠りが浅かった。

昨日のことをよく考えると、親父が今回「異世界に行ってしまう。」と言わなかったのは分からなかったからだろう。いつもは具体的に起こりうることを言うからな…。今は少し明るくなっているので、部屋の全体が見えるようになったが、どうやら日本の歴史でいうところの江戸時代みたいな感じがする。まさか、電気も普及していないとは思わなかった。異世界という自分の中では魔法があって、それを生活に応用していると思ったのだが…。

どちらにしてもドラゴンは信用できそうだ。しばらくは政治のほうは無縁と考えるのもいいだろう。というかそこまで詳しくはない。それにしても、これからどうするか……………

コンコン

「はい。」

「シヨウ様、入ってもよろしいでしょうか？」

「どうぞ。」

「失礼します。」

そう言うてはいってきたメイドは昨日とは違うメイドのような気がする。失礼だが、少し筋肉があるような…。いや、かなりかわいいなあ。

「ショウ様、私の顔何かついてますか？」

「いえ：朝食の準備はできていますか？今日は忙しくなりそうなので、早めにいただきたいのですが。」

「もう少しで出来るようです。ドラゴン様からあなたのことをうかがっております。あの公園で気絶なさっていたようですが、お身体のほうは大丈夫ですか？」

どうやら、この人が情報屋というわけではなさそうだ。しかし、メイドが次期国王に命令を受けることなんてあるのだろうか。ふつうはメイド長かなんかが命令するんじゃないのか。

「ショウ様？」

「大丈夫ですよ、一晚寝たせいか体のほうは問題ないです。心配しにくさってありがとうございます。えーと、お名前は…。」

「すみません。自己紹介がまだでしたね。私の名前はミミリー・ラリーといいます。普段周りにいる時などはラリーとお呼びください。このように二人のときは”D”とお呼びください。」

「”D”？」

「そちらについてはドラゴン様から直々にお話があることと思います。では、これからのご予定を申し上げます。

9時からドラゴン様との謁見をしてもらいます。その後、ドラゴン様と個人的に話があるそうです。

それが終わった後に城内の案内を私が行わせていただきます。

昼食後にショウ様は訓練場にて訓練を受けてもらいます。これにつ

いては昼食中に説明します。

夕食についてはドラゴン様がショウ様とお召し上がりたいそうですので、7時からにしています。ドラゴン様のご予定によって前後するとはおもいます。

以上ですが、何かご質問がありますか。」

「大丈夫です。で今からは？」

「朝食を食べていただいて、それから会見にふさわしい格好をしてもらいます。おそらく、時間になると思います。よろしいですか。」

「はい。」

なんか、俺はどうなるのだろうか。ドラゴンによく聞かなくてはならない。この様子だと早い段階から政治などで利用されることになりそうだ。訓練っていったい何だろう？もしかして、軍隊に？そういえば俺はいろんな能力などを試していなかった。そもそも、小説みたいに能力が開花するのだろうか。能力自体があるのだろうか。

「ショウ様、今日は朝からボーっとしていますよ。どうかなさいましたか？もし、気分がすぐれないのであればお茶でもしますか？すぐに用意できますよ。」

「いいえ、大丈夫です。おなかすいてますし…、早く食べに行きましょう。」

ご飯食べながら、いろいろ考えよう。謁見までまだ時間があるし…

「朝食ですが、謁見についての注意事項がございますので、私も一

緒にいただきたいのですが、よろしいでしょうか…？」

「はい…よろしいです…。」

この野郎…先に言えよ。顔が少し笑っているような…確信犯か？ドラゴンにも変わった部下を持っているな…

「こちらが食堂になります。おそらく明日からはここを使うことになるでしょう。覚えておいてください。今日はあちらの客員室で召し上がっていただきます。では、行きましょう。」

「…………。」

ラリーがドアを開けると広い部屋に小さなテーブルが…場違いじゃないか？

「驚いていらっしゃるようですね。これは私が手配しました。この場所には不向きですが、二人で話すにはちょうど良いとは思いませんか？」

「…………。」

ありがた迷惑というものを知っているのだろうか。普通の人には緊張して、ご飯がのどを通らないだろうが…

「すみません、ラリーさん。今すぐにお食事の準備をいたします。」

「まだ、時間はあるからゆっくりでよいわよ。」

「失礼します。」

「ではショウ様はこれからの謁見についての説明をいたします。」

まず、ドラゴン様のことは謁見などの場では、今日から、”ドラゴン国王”とお呼びください。これは各国異なりますが、メドール国では戴冠式の前日から国王に就任したとみなされます。実際には3代前からのことなのですが…。

そして、これが大事なのですが、シヨウ様は今現在”ドラゴン様の友人”ということで客人として招かれています。しかし、各国はともかくとしてメドール国では前例がありません。過去でも、このような状況でも”国王の威厳”を保つために、配下となることが決められていました。今回もシヨウ様が客人ではなく雇われます。国王様から聞いた話では長くここにとどまると聞いています。長く滞在された例はないのであくまで国王様の判断に任されました。国王様の部下になることはシヨウ様はあまり好ましくないかと思われませんが、我慢していただく以外どうにもできません。ご了承ください。

最後に謁見の場での注意事項ですが、謁見中はいっさい一切しゃべらないでください。ドラゴン様が答えを求められたときのみ、答えください。昨日、ドラゴン様からお聞きになっていると思いますが、今は状況がよくありませんので発言にはよく注意してください。実は派閥の方々が非常にこの会見に興味を持っております…。実は今日は戴冠式の前日なので、城内の準備等がありまして謁見は当初、最低限度の人数にしていたのですが、全員集まってしまいました。まあ、今日は何もないとは思いますが、ご用心を…。っとそろそろ食事の準備が整ったみたいですね。ご飯しましょう。」

「……………いただきます。」

ご飯食べる前に重すぎる話だったな。状況がある程度分かったので少し安心した。客室を出てからラリーは非常にピリピリしていた。とにかく周りに注意を払っていた。以上に見えたが、今の話で納得した。おそらく周りに派閥の者がいたんだろう。というより、たく

さんの人にすれ違ったからな。昨日は全く会わなかったのに…。

「その”いただきます”という言葉はいったい何ですか？」

「ご飯を食べる前に料理を作ってくれた人に感謝することと、僕たちが食べるために命を奪ってしまったから、それに対する感謝という言葉かな。」

「そうですか…。ここではあまり使わない言葉ですね。シヨウ様はどこ生まれなんですか？」

「すみません。ドラゴン国王から言わないようにと言われていたもので…。しかし、ここからは遠いところですよ。」

「ご心中察します。失礼なことを聞いてしまってすみませんでした。」

「?」

そこからは無駄話をしながら、ご飯を食べた。暗い雰囲気になりそうで怖かったけど、なんとか耐えた。

あれっ? さっきのメイドさんが…

「すみません! ラリーさんっ! お話が…」

なんでそんなにあわててんの? なんかいやな予感がするのですが…。

「わかりました。シヨウ様には私が話しておきます。迅速に行動してください。もしかすると人違いということも考えられます。ドラゴン様はこのことは?」

「はい。もう知っておられます。」

「そうですか…。ドラゴン様なら大丈夫でしょう。あなたたちも十分に注意をするのですよ。」

「はいっ。では、失礼します。」

「いったい何が？」

「ここではこの話はできません。少しお待ちを……。手荷物を持って客室に行きましょう。あそこならだいじょ」

「ガチャッ。」

「!!!!!!」

「動くな、ミミリー・ラリーとヒスイ・ショウだな。済まないが拘束させてもらう。一緒に来てもらおうか。」

「何をばかな！この方はドラゴン国王の友人であるぞ。こんなことをして国王がよく思うわけはあるまい。」

「関係ない。すぐに国王ではなくなるのだから。これ以上文句を言ったり、抵抗するのであれば、身の安全は保障できない。わかったか？」

「……………」

「では、この者たちを別室に連れて行け。乱暴はするなよ。今から交渉の役に立つであろう者たちだからな。」

「了解しました。」

結局のところ、この部屋は出て行くことになりそうだ。ここにきて、間もなく牢屋かよ……。波乱万丈だな。そんなことはどうでもいいが、誰でもよいから、状況を教えてほしい。これから、どうなるんだろう？

第1章第2話（後書き）

小説書くのは非常に難しいです。

いまさらわかりました。

感想お待ちしております。

第1章第3話

こんなに沈黙がづらいことは今までなかったと思う。後ろには3人の兵士前には2人。前の2人はどうやら身分が高いようだ。後ろの3人が非常に緊張している。それでも、本当に反乱がおきているのだろうか？もし起きているのなら、もう少し敵兵がいるはずだが…。今、廊下を歩いているが敵兵どころか、人が1人もいないぞ。どうなってんだ？しかもラリーさんはずっと話さないし…。そろそろ客室につくはずだが、さて誰がいるのだろうか？それともいないのか？ドラゴンの行方も気になるところだ。どちらにしても俺たちを自由にしてくれるような雰囲気ではないことは確かだ。

「お前たちはここで待っている。くれぐれも敵兵の奇襲に注意しろ。ここで彼らを奪われたら意味がなくなるからな。」

「了解。」

…数分後…

「入ってこい。この部屋は2人とも知っているな。お前はここに住んでいたという情報もある。俺たちはお前たちを人質として扱うだけで何も害を与えるつもりはない。しばらくの間、ここにいてもらう。わかっているとは思うが、変なこと考えるなよ。部屋の中にも兵士をつけるし、扉の外にも兵士をつける。変なことをしない限りは命の保証は約束しよう。もし、不審な動きを見せたら直ちに場所を移し、しかるべき罰を与える。お前たち4人はここに残れ。おれは本軍と合流する。ゴラン、お前がいれば大丈夫だな。ここからはゴランに指揮を預ける。ゴラン、任せたぞ。」

そう言って、隊長らしき人は出て行った。あの人は本当に隊長か？

それにしては太っていたぞ。まあ、隊長となると前線に近くにいて死んだら、意味がなくなるしなあ……。みんなこんな感じなのかなあ……。どちらにしても彼がいれば、逆人質として逃げることもなんてたやすかっただろうに。今はあせらずに捕虜になるべきだろうか。俺は確かに剣道をやっていたし、空手もやっていたが4人を相手にすることはまずなかった。喧嘩でも2人が一番人数が多かったし。相手は訓練された兵隊だ。そんなにうまくはいかない。どこかに脱出するか？　そういえば、おれはここにきて2日目だから、全く分らないんだった。ラリーさん次第ということになるんだろうな。人に頼ってばかりだな。

ゴランって人の指示により、3人の下っ端兵士は外での見張りということになった。ということは結構強いということになるんだがどうするのか？　ベストはラリーさんが逃げるまで俺が時間を稼ぐのが一番よいと思うのだが外の3人がどうしても難しいことになりそうだ。しかし、ラリーさんはずいぶんと落ち着いている。ラリーさんなんでそんなに落ち着いているの？　もう少しはあせろうよ……。つか、何を取り出そうとしてんの！！　あの人に見つかったら、殺されるだろうが！！！！

そう思っていたら、ラリーさんが体を密着させてきて

「ショウ様、落ち着いて聞いてください。今、現在国王軍は反乱軍と交戦しております。しかし、これは野戦ですので攻城戦ではないんです。この事態になったのは、貴族たちによる買収がほとんどであると推測されます。派閥のものは国王そのものを無力化することを望んでいますので、今回の事態は派閥のものがあまりに貴族をあまりすぎたことによるものか、もしくは他国からの援助を受けているかのどちらかです。

私は前者であると考えています。他国からの援助を受けても、将来

的には植民地化することになりますので、そんなことはしないでしよう。ということで今回は一貴族だけの反乱という風に考えられます。大部分の貴族はそれなりに頭がよいので、こんなバカげたことはしません。

大まかな状況説明が終わったところで、今度は今の城の状況についての説明をいたします。

先ほどもお話したとおり、ここでの反乱は小規模なものとなっています。国王自身が戦に行かれていますので、おそらくこの目的は城の確保によって補給線を壊すことにあります。そして、私たちを拘束するによって、国王に降伏をさせるつもりでしょう。しかし、ドラゴン様は拘束している人を犠牲にしても反乱軍を敗北に追いこみます。なぜなら、今回の反乱はおそらくではありませんが、国民に税ばかりを払わせて私腹を肥やしたものがおこしたとみられるからです。しかも降伏したところで捕虜や国王派の者たちは殺されるのが目に見えて分かりますからね。他にはそうですね、先ほど出て行った隊長からもよくわかります。訓練をまじめにしている方はあそこまでまん丸と太ることはできません。

現状を踏まえたうえで、今すぐ私たち3人はこの城の奪還へ向かうことにします。よろしいですか？」

「……話はわかった。覚悟はできてないが……。しかし、ここにはおれたち2人しかいないはずだが……？」

「すみません。話は変わりますが、ショウ様は人を殺したことはありませんか？」

「ない。」

「では、目を閉じておいてください。」

「な「外の3人、中に入ってこい。」

言葉をさえぎられる形になったがこれはまずくないか。あの兵士に聞

こえんたんじゃないか？ていうかそう考えるのが自然だ。人の真正面で話をしていたら、ばれるのは当然だろう：

「はっ、何か御用事でしょうか？」

「そう硬くなるな。今、あの2人がこそそ話をしていたからな。そこにある木の棒で少しお仕置が必要だと思ってな。剣はおいでいけ。殺されそうになったと言われたら厄介だからな：。」

「しかし、ゴラン隊長、木の棒は1つしかありませんが？」

「わからんか？女は違ってお仕置きの仕方があるだろう。」

「はっ、わかりました。」

どこまで腐った人間だよっ！！にやにやしたばかり面をしている兵士がラリーさんのほうを見ている。これは人質とかなっている場合じゃないな。おれには4人は無理だが、時間稼ぎにはなるだろう。彼らが剣を置いて近づいて来たら：。ここまでの人生みたいだな。我ながら波乱万丈な人生だった。すまないな、玲。約束は守れないよ。うだ。

あっちは誰が行くか、決まったようだ。剣を置いている。

あと5歩こっちに来たら、木の棒を持ったやつを気絶させる。そのあとは状況で判断することになるな。なんで俺はこんなに落ち着いていられるのだろうか？ここにきて変わったことは全くない。能力的にも確かに変わったところはない。いかん、集中集中。さあ、来るぞ。

あと3歩：

2歩：

1歩…

「オラァ。」

俺は1歩で彼との距離をなくし、顔を殴った。

『グシャ、ドサツ、カランカラン』

彼は完全に気を失ったようだ。この棒があれば…。

そう思って、振り返った瞬間、俺は背筋が凍ってしまった。

1人の兵士は首が飛んで、落ちていつていた。

もう1人はゴランが後ろから心臓を突き刺して、胸を剣が貫通していた。

「大丈夫か、“D”？あまりいい方法ではなかったかもしれないが、すまないな。この後、お前たちは事故と見せかけられて殺されることになっていたからな。これくらいしか思いつかなかった。」

「大丈夫よ、“F”。ありがとう。でも、あっちのほうがやばいことに…。」

「ガハッ、オエ…。」

「おい、なんかドラゴン様と聞いてたのとずいぶん違うな…。体力は非常に優れていると聞いていたが…？」

「いや、人は殺したことはないと言っていたわ。それにしても、もどすなんてそうないわね。まるで今まで、生き物を殺したことがないみたい…。」

「ガハッ、オエッ。」

「大丈夫ですか？」

「こっちは終わった。おい、早く行くぞ。任務が遅れるぞ。こいつはここにおいてく。1人かばって戦うのは無理がある。」

「でも…。」

「フーッ。」

「大丈夫ですか？」

「………のか？」

「え？」

「俺が人を殺さなければ、たくさんの人が死ぬのか？」

「いえ…その…」

「そうだ。」

「ちよつと“F”！」

「隠してどうする？ お前はドラゴン様に会っているんだろう？ どんなふうに感じたかはわからないが、普通の人とはかけ離れた存在だと思うんじゃないか。」

『俺は孤児だったところを彼に拾われた。ここの国では孤児は他国に売られるのが普通だ。その上、国民と話すのは基本的に禁止されている。しかし、彼は違った。俺に興味があったらしく、ずっと話しかけてきたし、しまいには部下にならないかと言ってきた。今は違うが、孤児は永遠に奴隷だった。彼の父親も努力していたが、その時は国力が弱くなかなか実行には至らなかった。そんな中、ドラゴン様は俺を助けようとすべて調べ上げた。証拠が固まったが、その者は重役だった。そいつは悪党をトップにさせて、裏ですべてを操っていた。みんな知っていたが、報復が恐ろしくて見て見ぬふりした。ドラゴン様が初めて会議に出たとき、これを問題に出した。しかし、みんな見て見ぬふりをした。さすがに、怒ったドラゴン様が言った言葉が

「人身売買なんかを自由にやらせている国には未来はない」

今でも、上の人は覚えている。その気迫に国王以外、言葉も発せなかったらしい。しかし、国王は他国に目をつけられる可能性があるために、部下は処刑には使うなといった。そして、処刑の当日、ドラゴン様が出てきた。帯剣しているのはドラゴン様だけ。皆が緊張していた。そりゃそうだ。この国で初めての公開処刑だったからな。でも、皆は彼は温厚だということを知っていたから、鞭打ちで終わるだろうと思っていた。だが、空気が一気に冷たくなった。そんな中、彼はゆっくり刀を抜き、1人また1人殺していった。女も子供も…。終わった時には、数百人の死体があった。それを俺だけのためにやったんだ。

その時にできたあだ名が「ドラゴン」だった。』

今、彼はお前のために戦っている。お前のような友人が出てくれば、貴族には面白くないことになるんだ。実質、身分差別しない形になるからな。今までのようにいかなくなるどこか、殺されかねないからだ。今ここで城を奪還しないとドラゴン様が帰ってくるときに、敵が立てこもることとなり、捕虜はすぐに殺される。

分かったな。お前は戦わなくてはならない。無実の人を助けるために…。そして、ドラゴン様のために。」

「……………」

俺の中で何かが外れた。

なんだろう…。この感じは…

「お前…、その眼は…？」

「シヨウ様…？」

「俺は戦う。無実の人を助けるために…。」

「現在地はここだ。丸をつけている部分が反乱軍本拠地だ。人数は200人程度、対するこちらは3人。捕虜が1000人程度と考えられる。3人じゃさすがに200人は無理だ。しかし、捕虜を解放できれば、確実に勝つことができる。捕虜拠点は3つ、10人程度見張りがいると考えられる。中央にシヨウ、左に“D”、右は俺“F”が行く。皆が一斉に奇襲をかけないと敵本陣から応援が多数来る。それでは皆死んでしまう。何か質問は？」

「無茶よ…、シヨウ様は人を殺したことがないのよ。しかも、中央は敵兵から丸見え。考え直して。失敗したら元も子もないわよ。」

「いや、無理だ。シヨウには知り合いがない。信じてくれるかどうかわからないだろう？しかし、運よく中央には昨日の馬車の警護にあたっていた者が捕虜になっていると聞いた。シヨウ、大変かもしれないができるな？」

「兵士は殺さなくてはいけないのか？」

「殺さなくてもよいが、反乱に加担したとしてほとんどは追放処分になるだろう。皆そうなる前に自殺をする…。」

「わかった。殺したほうが良いんだな。」

「そうだ。解放次第、一旦中央へ集まる。そして、本陣の3つの扉から同時に攻めるのがよいだろう。では、行くぞ。手を合わせろ。」

「メドール国のために」

「「メドール国のために」」

第1章第3話（後書き）

少しではありましたが、はじめての戦闘の描写書いてみました。いかがでしたか？

お気に入りに登録してくれた人ありがとうございます。

これからもよろしくおねがいします。

第1章第4話

「じゃ、ここからは各自1人になる。絶対に逃げるなよ。」

「もちろんだ。」

「では、ご武運を。」

改めて今から1人だと感じた。ここまで来るのに敵兵は2人しかいなかったが、2人とも俺が命を奪った。初めて人を殺すというよりは捕虜になっている人たちを助けるといふ使命感が俺を動かしているようだった。実際に命を奪うのは怖いが、今はなぜかそれしか感じない。少し大きな動物を殺しているかの様だ。しかし、“D”と“F”は俺が殺したという事実よりも殺し方がよくないと俺に言った。多数の敵を相手にする場合、刺して殺すと次の動作に遅れが出てしまい危険だといった。確かに俺は刺していたが、それが確実だと思ったからだ。殴りあいはいはしたことがあるものの、人は殺すのは初めてだ。自分の知らないことはたくさんある。だが、それはここでの生活に慣れるためではない。自分が生きていくため、そして仲間を助けるためだ……。そう言い聞かせてはいる。

俺は深呼吸をした。

ここからは1人だ。そして、今までとは違い奇襲をかけることはできない。兵士のレベルも違う。何より自分の気持ちが強くないところからはやられてしまう。それによって相手に奇襲に気づかれ、“D”と“F”が苦境に陥る。負けられない戦いだ。

「行くぞ。」

そして、俺は駆け出した。

走って2分後たくさんの兵士たちがいるのが見えた。運よく弓矢を持っている兵士はいないようだ。人が2人分しか通れないこの通路なら勝機はある。俺は走る速さを上げた。

「そこのお前とまれ！おいつ、止まらないとこ……ぐはっ。」

「敵襲……！！やつを打ち取れ。」

俺は1人目の首を切った。もちろんささずに。流れるように戦わなくてはならない。立ち止まれば人数でやられる。そんなことはもう分かり切っている。次の兵士が上から切りつけてくる。それをよけ、左腕を狙いきった。殺さなくても無力化できれば、こちらの勝利だ。

「油断するな。数はこっちのほうが上だ。少し下がって、扉の前で打ち取れ。」

「させるかよ！」

こっちは1人だが、相手はまだ20人はいる。隊長をはやく殺さなくては……

突き刺してきた兵士を何とかかわし、鎧ごと胴を切った。敵の血が俺の鎧を汚してゆく。体力には自信があったが、初めての戦場と戦いで俺の体は悲鳴を上げていた。俺は目の前にいる敵を首ごと持っていき叫んだ。

「俺の名前はヒスイ・ショウ。そのふんぞり返っている臆病者はここの隊長か？情けない。俺は初めて戦場なのに、お前はじっとしていることしかできないのか？臆病者が！！」

あまりうまいとは言えない挑発だが……

「小僧になめられるとは俺も落ちたものだ。お前たちは手を出すな。俺が直々に相手してやる。」

「隊長だめです。ここは「お前の言うことはわかる。しかし、やつは脱走してここまで来た。これは俺の監督責任だ。そして、お前たちはあいつに恐れを抱いている。ここで俺が逃げたら、士気が下がる。後には引けん。そして、これは最後の命令だ。本部に援軍をもらってこい。あいつに負けるつもりはないが、お前がこの後やったほうがいい。」

「小僧、俺の名前はカース。ここでの城の防衛の総隊長だ。もし、俺を倒すことができたなら、名前を覚えてやろう。いざ、参る。」
「!!!!」

一瞬で俺の目の前に……。俺は上半身をそり、何とか剣劇を避けた。俺がお見舞いとばかりに剣で切ろうとする。が、

『ドコッ』

敵は床に刺さった剣に体重をかけ、足蹴りをしてきた。俺は予想もしていなかった攻撃をまともにくらい、床を転がった。だが、相手は待ってくれない。

「死ね!」「!」

間一髪で横に転がった。あらかじめ、腰に刺しておいた手刀を投げる。彼はそれをかわし、その間に俺は起き上がって距離をとった。それを待ってくれず、彼は上から切ってきた。俺はそれを受ける。

『ギヤアアアア』

剣特有の剣音が聞こえる。

「小僧やるな。我が部隊にほしいぐらいだ。」

「ッ、貴様には仕えん。」

「おしいな…。地獄で後悔するがいい！」

そして、力を込めてきた。俺では力負けする。これでは…押し切られる。剣道の基本を思い出せ。力で勝てぬときは相手の力を利用しろ。

『フッ』

力を受け流し、相手がすきを出したその時に、

「小僧、貴様…」

『シュッ』

彼の首を浅くではあるが、切った。これで動けまい。今回は相手が油断していたようでよかった。ふつうであれば負けていたはずだ。それよりも…

「次はだ……」

誰だと言おうとして、体が腰から落ちた。体力が限界だ。

「くそっ。体動かない。」

膝を叩いて、何とか立ち上がったところで、後ろから殺気が…

『ガスッ』

彼が最後の力で手刀を投げたのだ。

「ぐああああー！ー。」

「いま、だ。彼を打、ち取れ。油断は、大敵だぞ。小、僧」

「弓矢兵、射撃用意。」

俺がここまでかと思った時、

「パキイイイイン」

相手のすべての弓矢が碎けて行った。いったい誰が？前ばかり見ていた俺が後ろを見ると、

「グハッ。」

「全員武器を捨てろ。死にたい奴は俺が殺してやる。」

殺気は敵隊長でなく、

「ドラゴン…」

俺は殺気で全くと言っていいほど、体を動かすことができなかった。これが“F”の言っていたドラゴンの殺気か…もちろんラースとかいった奴にはとどめをさしている。

「大丈夫か…シヨウ。よくやったな。ここからは俺たちに任せるがいい。だれかシヨウを治療しろ。左と右はどうなった？」

「今、攻略中です。」

「分かった。あっちはどうなった？」

「わが軍が勝利し、頭領を打ち取った模様です。今は追撃していま

す。」

「国境近くになったら、撤退させろ。その間に、俺達でここを落とす。」

「御意。」

その時、

『バン』

「全員、武器を捨て：ドラゴン様、ご無事で？」

「大丈夫だ。」

なんといいタイミングで“F”が出てきた。さすがにあいつらは強いな。俺よりも早く攻略：、俺は殺されそうだったな：。

「ショウ様、今から治療いたします。少し痛いですが、我慢してくださいね。」

「!!!!!!」

抜くなら抜くって言えよ。ものすごく痛いだろうが！相手は全員投降したらしい。だが、なぜドラゴンがここにいるんだ？話によると野戦だということでドラゴン自身が指揮を執っているはずだが：。もしかして、違う事態が起ったか？っていうか、痛すぎて、頭が痛いんだけど：。麻酔なしで縫ってるよ、この人。もう少しやさしくできないのか。イタイイタイ。

「よし。敵を縛り終えたな。皆聞いてくれ。」

今回のことを話す前にまずはここを落とさなくてはならん。本当は俺が指揮をとるべきだが、所用があって別部隊を指揮しなくてはならないだろうと思っている。左の部屋にいた者は俺とともに来い。

残りの者はここの攻略に全力を尽くせ。指揮はここにいるシヨウに任せることにする。何か質問はあるか？」

「なぜ、彼なのですか？彼は戦が初めてなはず？違うものの方がよろしいのでは？」

「いや、今回は特別だ。それに彼はカースを打ち取った。俺個人としては彼の实力を見てみたいのだ。もし、不安だったら君たちがシヨウを全力で補佐すればよい。ほかに質問があるか？」

「……………」

「では、急ぎ準備をしろ。シヨウ頑張れよ。」

いきなり、指揮を丸投げされるとは…。

“F”が近づいてきて、

「シヨウ様、今から軍議を開きます。ここに座ってください。あなたが軍議を進めることになります。よろしいですか？」

よろしくねえよ。休ましてくれ。っていうか皆俺が言うのを待っている。はあ…。そんな柄じゃないんだが…。

「では、今から軍議を始める。まず、相手の情報を教えてくれ。」

「はい。現在反乱軍は見ての通り、籠城をしております。これを考えますと外からの援軍があると考えられます。そのため、国王様自身は城前にてこれを迎え撃つつもりです。なので、私たちは背後に気にすることなく攻めることができます。敵兵はおよそ200名ほど。対するこちら国王軍は600名程度。しかし、城の構造上、少数の兵士で守ることができるように通路が三つに分かれており、攻めるのは困難です。さらに見通しが良いので早い段階から守られることが予想されます。」

「分かった。敵指揮官については？」

「武力には優れていますが、はっきり言ってバカです。ですが、彼は情報通でもあります。こちらの戦力は把握されていると考えられます。」

「話は変わるんだが、ここにいる給仕はどれぐらいいる？」

「えーっと、100人程度だと考えられます。」

「よし、策は決まった。給仕を全員連れてこい。後方で待機するだけだからと言って連れてこい。」

「しかし、シヨウ様：今までこのようなことは…」

「ここでは俺が一番偉い。黙って従え。彼らが来たら、策を説明する。皆よいな。」

「……はっ！」

みんな忙しげに動きは始めた。今回はこの方法がというよりもこの方法しかないだろう。“F”から情報を聞いた時、この方法を言ううとしていたのだ。

「シヨウ様、傷のほうは大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。ラリーさん。」

実は治療してくれたのはラリーさんだったのだ。さすがに覆面をかぶられるとだれか始めはわからなかったよ。

「シヨウ様、もう少しで給仕たちが集まります。説明のご準備をお願いします。」

「分かった。」

なぜか彼女が俺に就く側近みたいな感じになっている。そういえば“F”はどうした？

「全員揃いました。」

隊長って感じだな”F”は。

「では、これから説明する。」

第1章第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

それにしてもなかなか先に進みません。

戦闘描写が下手くそです。すみません。

感想等あればお願いいたします。

第1章第5話（前書き）

遅くなりました。

すみません。

第1章第5話

「ショウ様、本当に大丈夫ですか？我々だけで行ってもよいのですよ。肩の傷だってまだ完治はしていませんし、いつ開くか分かりません。ゴランと私がいれば作戦は実行できます。」

「くどい。ここで俺が行くのに意味があるんだ。総隊長が行かなかつたら負けているようなものだろう。いつも相場はそうだ。勢いを殺さないためにも俺が前に出る。」

怪我している俺はもちろんと突撃部隊隊長として出陣する。そのことによって、士気が高まっている上にカーンとかいう隊長を倒したのも大きくかわっている。俺自身は正直、足が震えている…。隊長になった気持ちがよくやく分かった。敵隊長は俺とは違い、しっかりとした隊長だった。すべてを分かった上で、自分の挑戦を受けたのだろう。実際に今回は俺の作戦によってたくさんの部下が死ぬことになる。下手すると全滅というのも十分にありうる。

「隊長、よく決断しましたね。」

「そんなことより準備に抜かりはないだろうな。ゴラン、ラリー、二人ともタイミングを間違えるなよ。」

「はっ！」

「別働隊はゴラン、ラリーに従え。それ以外は俺と出陣だ。ついてこい。」

『oooooooooooo』

走っていくと扉が見えたが、弓矢兵が構えている。伝達が届いたのか、それとも相手が見張りを立てているのかは分からないが…。

「盾兵、前へ。それに従って前進しろ。人数は五人で行く。だれか志願者はいないか？」

「……………」

「では、俺が行くか。」

「隊長は後ろへ！」

「いや、俺も行く。」

「駄目です。お下がりください。今は命をかける時ではありません。」

「……………分かった。気をつけて前進しろ。三人は相手の状況を報告を頼む。」

「了解。」

彼らは指示通り、少しずつではあるが前進を開始した。弓矢が絶えず、降ってきていた。しかし、通路が狭いため盾を破れるほどの量ではない。弓矢兵も狙いにくいようだ。もう少して扉に到着する時、近くの天井が開いた。もちろんそこから弓矢兵の伏兵がいた。そして、彼らはなすすべなく死んだ。だが、作戦は立てることができ。今、自分が最善の方法を尽くすことが彼らのはなむけになる。自分ためにこうなったのだ。これ以上の犠牲は出してはいけない。それにドラゴンが言ったことは正しかったようだ。

「給仕、火炎瓶は持ってきたか？」

「あります。」

「もう一回立ちなおして再度突撃する。盾兵を二列にする。歩兵部隊をはさんでもう一列盾兵をつける。歩兵は火炎瓶を持っていけ。天井が空いた瞬間ではなく、打ち終わりを狙え。盾兵は弓矢を死守

しろ。特に上の攻撃はいつ出てくるか分からない。特に気をつけろ。守っていれば、必ず隙ができる。耐えて隙をねらえ。報告隊を再度組織する。相手の出方に注意しろ。では、行け。」

「はっ！」

おそらくこの世界には織田信長がやったような三段うちみたいな打ち方はないはずだ。それがなければ一回守ってしまえばチャンスが生まれる。今回はうまくいくはずだ。

そして、弓矢の数は増えることはない。少人数で対処できる分大人数で対応できることはできない。逆にこの狭い通路が仇となっている。あの地点に兵が近づいていく。そこに到達したとき、天井が空いた。弓矢が降ってくる。今度は防いでいる。みんな耐えろ。

矢が切れた。あわてて準備をしている。

「いまだ！ 投げろ。」

俺は声を張り上げた。歩兵は全員、天井へ火炎瓶を投げた。天井は閉まった。が、今だに燃え続けている。いずれは鎮火するだろうが、この戦いの間は使えないだろう。それは一酸化炭素中毒なるからだ。この世界の人たちは知らないだろうが。今が押すときだ。待つと敵兵が無駄に増えるだけだ。

「よし。今から突撃する。準備しろ。ん！？」

「報告します。相手の数が増えました。どうやら、全員がこちらのほうに向かっている様子です。扉を死守模様です。」

「俺たちは全力で相手をたたく。俺も出る。」

「了解。」

ここから俺の作戦だ。それを悟られないようにしなくては……。そ

のためには全兵をここに使う。

「行くぞ。俺についてこい。扉をうちやぶれー」。――

「クソッ、あんなところで火炎瓶を使うとは……」

「相手は突撃するようです。いかがなさいますか。」

「全兵使え。ここを突破されたら終わりだ。しかし、ここは6倍の兵力がないと突破できないようになっている。おそらく、敵兵は攻めあぐねるはずだ。」

「はっ、そのようにいたします。」

「攻め続けろ。相手は俺たちの3分の1だ。必ずどこかに隙ができる。そこを狙うんだ。」

そうねぎらうもちちに分が悪くなっているのは事実だ。こちらは矢を防ぎながら前進をしている上に、被害が50人を超えている。対してあちらは10人：もう士気が持たない。そう思った時、自分の策は動いた。

「動くな！！全兵、武器を置け！！」

違う扉2つから、ゴランとラリーが攻めたのだ。

『ガシャン、ガッシャン…』

この部屋の構造を敵兵たちは誰一人として知らないものはいなかった。秤量攻めならともかく、この玉座の部屋の守りは援軍がある状態、もしくは部屋外での防衛戦で発揮される。この部屋の中にはたくさんの隠し扉があり、そこから通路の壁へとつながっている。本来、これは鍵がすべてかかっているが、使われたことがないために確認されたことがなかったため、天井からの攻撃が行われたのだ。というよりもここまで攻められたことがなかったので仕方ない。ちなみにその鍵はもちろんドラゴンが所有しており、それは王家に代々受け継がれてきたものだ。た。

これを知っている彼らは中に敵兵がいては確実に負けるということを知っていたので武器を置いたのであった。

「貴様ら、どうやってそんなにたくさんの兵を集めた？」

「まだ分かりませんか、将軍？彼らの後方にいるのは偽兵です。単純に言うところにいる給仕たちです。あなたは情報戦において活躍するのを事前に知っていました。しかし、この部屋にこもっている情報は情報を得られないので、それを逆手に取ったのです。将軍が御自身の能力に過信していたためにこの作戦にまんまと引っかかってしまったわけです。もし、偽兵の動きをみればすぐに分かったでしょう。この代償は死をもって償うことになりそうです…。」

「そうだな…しかし、この作戦はお前が考えたわけではあるまい。お前は統率・武力ともに高いが、智謀には優れていないのは分かっている。その女というわけでもなさそうだな。上の人間が安全な別働隊を率いるのはかなりの信頼がいるからな。俺が見る限りは扉

のほうにいる奴か……」
彼がそう思った時、扉が開いた。

俺はあちらのほうで何か起こっているのが分かったが、気は抜けない。攻撃は止まったが、伏兵がいるとも考えられる。

「シヨウ様、敵軍は降伏した模様です。すでに別働隊の方々は到着されて完全に制圧をしています。」

「分かった。……皆のもの聞け。この戦闘は我々が勝利した。」

『わああああああああ』

すごい熱狂ぶりだ。でも、俺たちが勝ったこの戦場には死体が大半を占めている。通路が狭いだけに余計にそれが目に映る。

副官に近づき、

「この後の処理についてだが、捕虜を縛るまで監視をする兵を100名ほど、そして縄とここの通路をそれ以外の兵で頼む。俺はお偉いさんと話があるだろう。」

「分かりました。では、ここにいる100名を護衛といたします。まだ敵兵が残っていないとは言いきれませんので。シヨウ様、お見事でした。」

そう言って彼はほかの兵の説明に向かった。

「では、行くぞ。」

扉を開くと敵兵の指揮官らしき人物がいた。思ったより、体つきが華奢だ。

「お前がこの作戦を考えたのか？」

「そうだ。」

「完全にしてやられた。いいわけではないが、俺は戦場に出て指揮官をするのは初めてだ。いつもは後方にて2人で指揮を執っていた。早い話がカーンと一緒にだ。彼は武力が優れ、俺は情報収集が得意だった。2人で指揮をとっていればよかったな。」

「……。ということは情報によって俺たちをだましていたのか？ともに武力が優れるとの情報を得ていたのだが……」

「……そうだ。そのほうが相手に恐れを抱かせ、指揮を下げる。これが俺たちが考えた作戦だがどちらかが倒れてしまえばそれで終わりだ。何年も練ってきたがだめだったな。個人の武力に頼ろうとするそれが間違いだったのだろうな。それでこれから俺たちをどうするつもりだ？」

「それはドラゴン国王が帰還されてから処遇が決められることになりそうです。しかし、俺は客人であり、よくわかりませんが……」

「そうか……お前がヒスイ・ショウか。ここにきてすぐに戦争とは……飛んだ災難だったな。」

「……すみませんが、抵抗などされませんように。」

「分かっている。」

本当に運がないな俺は。

それからは下の者に任せた。というより、全く分かっていない奴が

やると時間がかかるので辞退させられた。当然と言えば当然だ。適材適所、それが一番よいに決まっている。

よく分からない部屋にて、“D”と休んでいた。

「御苦労さまでした。」

「いやいや、“D”こそ疲れたろう。」

「ええ…、しかし、そうとは言っていないかもしれません。」

「何が？」

「今回の戦にてショウ様は国王派に所属したと考えられるでしょう。そして、今回ショウ様が倒したあのお二方は将軍です。おわかりでしょうが…。」

「おいおい、まさか…?」

「……御愁傷様です。今からは忙しくなりますよ…。」

第1章第5話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

なかなか前に進みません。

第1章終了までが遠い…

感想や誤字脱字等、お待ちしております。

第1章第6話

「ドラゴン国王がお帰りになりました。シヨウ様、準備をお願いいたします。」

「分かった。」

「今回の謁見は戦況と報告がメインです。シヨウ様の謁見についてはまだ未定となっております。しかし、予想しますにはシヨウ様は今回の戦で活躍いたしましたので千人隊長かもしれない。それよりも上の位が与えられることになると思われます。客人として扱われることは二度とないと考えられます。よろしいでしょうか？」

「よろしくないが、しょうがないんだろうな。」

「…………。すみません。参りましょうか。」

「行くか。」

「シヨウ様がお着きになりました。」

扉を開けるとたくさんの人たちが座っていた。予想以上に状況が良くないのだろうか？

「シヨウ、よく来たな。お前の席はここだ。」

そこは非常に眺めがよさそうな場所だった。

「すまないが、お前はもう客人としては扱えそうにない。今回の戦でお前は將軍へと格上げされる。客人の地位はこの国では城に仕える中で一番下になる。そんな位にはお前をおけないのだ。戦の状況を聞く限り、最善の策をこの城でとったことは非常に評価できる。」

ここの者たちにはすでに説明している。それでお前の地位は將軍と
いうことになった。後はお前の返答次第だが、どうする？」

「ちなみに断ったらどうなる？」

「本当なら死刑というところだが、お前はこの国のものではないの
と俺の友人という立場から考えると国外追放と特級罪人ということ
になる。特級罪人というのはこの国に來たら逮捕するが、ほかの国
にいた場合はこちらから罪人を渡すようには請求しないという変わ
った形になる。」

結局のところやるしかないんじゃないか…。

「分かりました。もちろんやります。」

「よかった。では、ここに座るがよい、シヨウ將軍。今から、評定、
戦況の概略と軍議を行う。今回の進行役は参謀長のスタイナーが行
う。では、頼む。」

「分かりました。シヨウ將軍、はじめまして。スタイナーと申しま
す。では、今から戦況についてご説明いたします。今回の首謀者は
ガラシア・メドール・ラスファです。御存じの通り彼はこの国の筆
頭貴族であり、彼の家は代々国王家に仕えてまいりました。あくま
で確証はありませんが、彼以外の一族は全員各自の家にいたという
情報が入っております。この様子から彼が長い間敵国と内通してい
たものと考えられます。この動きに呼応して、今、軍を動かしてい
るのがダムイ国であります。この様子からもこの推測は間違いない
と考えられます。しかし、今急がなくてはならないのが、戦後処理、
国王の戴冠式とシヨウ將軍の將軍位の継承の儀です。これはしきた
りとして国王になるとされるのは戴冠式の後だと明記されているか
らではなく名目上の党首である状態では国軍を動かすことができま
せん。同じく將軍の儀のほうもやらなくてはなりません。今のところ
シヨウ將軍が軍隊を動かすことにはなっていませんが、万が一に
備えてやっておかなくては將軍として軍を動かさませんので…。ど

ちらにしてもこれから戦うのは敵国であります。ということは国王がいないと国として認められないと国際条約にて決まっております。国内の戦いではドラゴン国王が戴冠式を行うことも国民は知っており、問題がありませんでした。厳密に言えばあるのですが……。しかし、国際戦争ではそうはいきません。必ずやダムイ国が其処につき武装解除を求めてきます。そうなった場合、非がこちらにあるとみなされ、国内外から攻撃が来ることでしょう。これらのことを加味したうえで、私の考えでは明日にも戴冠式を行ったほうがよいと思います。ドラゴン国王、いかがでしょうか？」

「構わん。」

「ドラゴン国王の承認をいただきましたので今から評定へ移ります。賛成の方は右腕を上げてください。反対の方は左腕を上げてください。」

全員、右腕を上げた。

「賛成多数で可決されました。次にショウ將軍の將軍の儀も明日のほうがよいと思われます。ドラゴン国王、よろしいですか？」

「構わん。」

「ドラゴン国王の承認をいただきましたので今から評定へ移ります。賛成の方は右腕を、反対の方は左腕を上げてください。」

反対は5人、賛成は6人。ギリギリじゃん。

「……賛成多数で可決されました。では、このことを給仕の者へ伝えてまいります。ドラゴン国王、その間に判別の儀をお願いします。」

「分かった。準備をする。お前が帰ってきたら、始めるとしよう。皆のもの、少し体を楽にしろ。準備をする。スタイナーが帰ってきたら、判別の儀を始める。」

そう言って、ドラゴンは出て行った。一体、何を行うのだろうか？
と知っている…

「お前がヒスイ・ショウか…。俺はラキアスだ。お前を將軍に認めるわけにはいかない。俺たちは10回の経験を経て將軍になっている。若造は一般兵で頑張ってこい。」

やっぱこういう奴がどこにでもいるんだね…。しかし、これを投げだすと俺の命が危ない。

「俺はドラゴン国王の客人なんで分からないが、昔ながらの將軍が今も將軍になれるほどの實力を持っているかといったら違うだろう。年寄りは一ささと引退して若者に任すんだな。それともここで試してみるか？老將軍ラキアス殿？」

「貴様あ、言わせておけば俺をなめよって…。いいだろう。ここで相手をしてやる。剣を抜け。」

『やめろ！』

『やれやれ、將軍の實力を見せてやれ！』

ここでも半々か…。俺は剣を抜いた。

「何をばかなことをしている？」

ドラゴンがいつの間にか玉座に座っていた。すごい殺気だ。

「敵を間違えるな。今倒さなくてはならないのはダムイ国の軍隊だ。ショウ、お前はすぐに熱くなりすぎる。冷静な判断ができてこそ將軍と呼ぶことができる。お前が死ねば、誰が軍を指揮することができのうだ？軽率な行動は慎め。ラキアス、お前もショウを挑発して

なんになるんだ？見損なったぞ。今度からはこういうことをやめろ。仲間の結束が弱い国はいずれ滅びる。分かったな。心の中だけにしておけ。皆のものも心に刻んでおけ。」

ドラゴンがしゃべり終えたところにスタイナーが戻ってきた。

「一体、この騒ぎは？」

「もう良い。終わった。それより、しっかりと伝えたか？」

「はい、こちらのほうは？」

「持ってきた。やるぞ。では、今から判別の儀を行う。シヨウ將軍、前へ。」

「はい。」

ドラゴン：少しは何やるか教えてくれよ。不安で仕方ないよ。

俺は恐る恐るではあるが、ドラゴンのところへ歩いて行った。何やら小さな水晶玉を持っている。

「シヨウ將軍、これに手を置くんのだ。確実とはいふことはできないが、これで君の能力が分かるであろう。前の戦で君の眼が真っ黒になったという情報を受けている。この水晶玉に触れれば、その能力が具象化するのだ。基本なことを説明しよう。それぞれ人間は能力を持っているが、開花する人間はごくわずかしい。しかも、戦闘などで発揮する能力となるといないに等しい。実際に使われたことはないといったほうがよい。あまりに強い能力はかえって邪魔になる。説明は以上だ。さて、どんな能力かな？楽しみだ。」

言われたとおりに俺は手を水晶玉に乗せた。

なんか出てきたな。

「おいおい、具象化って言ってもでかすぎるだろうー」。――

「落ち着くんだ、シヨウ。人体に被害はない。」

そう言いながらも、具象化がまとまっていったのが分かった。いつの間にやら小さくなっている。

「これは何だ？」

「1つは分かるな。炎を扱う能力だ。どの程度扱えるかは分からないが……。もう1つは何だ？ 真っ黒だな……。よくわからん。しかし、こっちの能力がすでに覚醒している。シヨウ将軍、戦のときに何か変わったことはなかったか？」

「いえ、何も……」

「まあ、早くわかるといいな。個別で能力について説明する。では、軍議に移るとしよう。シヨウ将軍、自分の席に戻れ。常に自分の能力を早く把握することを念頭に頑張ってやれ。」

「はい、分かりました。」

「では。ここからはスタイナーが話を進めていく。スタイナー頼んだぞ。」

「はい。簡単にまずは概略を説明いたします。まず、敵軍は3つに分けて出陣するという情報を得ています。橋が3つあり、そこを通ってくるかと考えています。今回軍を率いるのはギュスターブ10世、11世、12世となっております。この3人は世界三大将軍といわれているそうです。実際に我が国が戦うのは初めてですが、情報によりますと10世は武智ともに優れており危険です。隙をつくとすれば、11世が武に12世が智に偏りがあります。通常の戦法で行きますと彼らをバラバラにして戦うのがよいと考えています。兄弟であるために彼らは連携に優れております。我が軍では太刀打ちで

きないでしょう。本来なら橋の上での戦いが最も有利でありましたが、今となってはそれは不可能です。彼らはすでに出陣したとの情報を得ています。今からでは我々が彼らよりも先に橋につくことは不可能でしょう。しかも彼らは戦場にて能力を使用したという噂があります。事実は分かりませんが、もしそうだとしたら我が軍は圧倒的に不利です。

次に我が軍隊についてです。我が軍が徴収できる軍は全部で4万人。対する敵軍は2万5千人。通常の戦いでは勝てますが、ここからの将来を考えますとできれば、被害は最小にするべきです。まだ、貴族の掌握ができていないので、もし被害が大きければ、貴族の台頭を許してしまうことになります。それにこの軍隊は直属の軍隊ですので打撃を受けますと国力を弱めることにつながります。相手はそれをねらっており、外交をうまく円滑に進めようと考えております。相手は我々の植民地化はねらっていないようなので、相手の各個撃破を目標にしていけば必ずや相手は撤退するでしょう。何か質問等ありますか？なければ、地図にて説明いたします。

ここからは作戦を考えます。各將軍、発言をお願いします。

では質問がないようですのでこちらにお越しく下さい。ドラゴン国王もお願いいたします。」

全員が前の机に広げてある地図を見ていた。それにしても変わった地形だ……。周りは川に囲まれているのに大きな山が三つもある。これでは完全に国力は上がりきらないだろう。反対に考えれば相手の責めるメリットがないからよいのかな……。明らかにこの国は島と呼ぶことができるのだろうか……。なんだろうか、元の世界でこの地形を見たことがあるような気がする……。俺は地理が嫌いだったから、あ

んまり覚えていない。光二なら覚えていただろうに……。それにしても上の大陸だけに橋がかかっているというのは妙だな。近くには割と大きな村か町がある。不思議な感じがする。

「スタイナー、お前はどうかんだ？」

「私はこの山で火計をやるのが一番良いと考えています。」

「それはまずくないか：山がまる焼けになるぞ：。」

城の大きさから考えても、この山は同じくらいもある。それすべてに火をつけてしまったら、近辺の村に被害を与えてしまうのは確実だ……。それにここに誘い込んで火計を行うのはかなりの人数が必要になり、味方に被害が出る。西側に小さな村があったがこの国にあるのは全部で四つだし……。被害があればまずいだろう。

「黙れ、下っ端。もっといい作戦があるのか？ ないなら、発言するんじゃない。」

「おい、ラキアス。お前、軍議の意味を分かっていないだろ。」

「いいですよ、別に。しかし、この作戦は非常に危険だ。山自体が大きいたくさんの兵士を隠せる上に相手の大群が入らないと火計の意味はない。かえって、自分たちの土地を破壊して、味方も死ぬことになるる。」

「シヨウ將軍の言うとおりだな。今回の作戦は意味がないとはいえないが、成功する可能性がかなり低い。それだったら、正面から戦っても一緒だ。そっちのほうがかえってましかもしれん。」

「でも、ここにも山があるんじゃないのですか？」

「いや、その山は落雷の影響でもう一つの山も焼けてしまいました。」

「先ほど言った山はどんな地形ですか？」

「うーん、普通の山としか……。まあ、夕方になると見えなくなりますが……。」

そうかだったら、いい作戦がある。

「どうした？ ショウ將軍なんかいい案が浮かんだか？」

ドラゴンは人の顔を見て判断するのが非常にうまいな。

「はい。この作戦はどうでしょうか？」

俺は説明を始めた。

第1章第6話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

もう少しで第1章が終わります。

感想お待ちしております。

第1章終話（前書き）

遅くなりました。

第1章終話

「こんなこととしてよいのかねえ…。」

「まあ、これは必要なことだからな。これで出陣することができる。国王なんてのは一番偉い役職だからな、所詮。それよりも明日の準備は大丈夫か？正攻法でも勝てるんだぞ？策は破れたときに大敗を喫することもある。」

「いや、大丈夫だ。今回は前と違っていろいろやるからな。というよりも相手のこういうやり方は好きじゃないんだ。」

「だがな：こういう戦いが多いんだよ。条約上他国へ攻め入るのはそれ相応の理由がある。たとえば、数十万単位の大虐殺とかな…。」

「そんなことはさすがにないだろ？」

「ないない。そんな顔するな。それよりも炎の訓練をするぞ。式が終わったら、着替えて俺と一緒に訓練場に来いよ。」

「はっ？お前も出陣するんじゃないか？」

「しない。今回は將軍同士の戦いだ。国王が関わることはない。反乱は国内だからいいんだけどな…。それよりも能力のことだが、誰からか聞いているか？」

「聞いてない。」

「まず、この世界のものは全員が何かしらの能力を持っている。それを引き出せるかどうかが才能の差ということになる。俺は氷の能力を使うことはできるが、それは物に対しての能力であることが分かっている。もちろん、物を凍らせながら人間を凍らすこともできるがそれ自体が熱を持っている場合だとそれを凍らすわけだから、それ相応の体力がいるし、たくさんの人にしようとすることは不可能だ。」

「ということは実際にやるには能力だけではなくその”何か”がないとできないわけか？」

「まあ、そういうことだ。それが分かんないんで俺たちは単純に”

才能”と呼んでいるわけだ。しかもこれは最近のことではよくわかっていないんだ。」

「では最近になって使えるようになったと？」

「そうだな…。」

だとすれば、まったく無知な能力ということになる。俺はここにきて使えるようになったのかな？

「どちらにしても使いすぎると疲れるし、動けなくなる。俺はそこまでやったことはないが…。俺も当初よりも使えるようになったのは確かだ。使えば、使えるようになる…と思う。」

「あいまいだな…。」

「しょうがないだろ。もう少ししたら式が始まる。準備しておけよ。」

「分かったよ。」

体が強張った。て言うか、片膝ついて二時間はしんどいよ。もう少し短くならなかったんかい？王様が早くて、配下は長い理由が分からん。しかも昼は立食だったし…。そろそろ着替えないと時間に遅れるな。

「將軍、入りますよ。」

「いいよ。」

“D”ともずいぶん打ち明けられるようになったんだが…仲間が少

ないような気もするな。もう少しいろんな人と話をしようかな…。
ラキアス將軍とか…。

「ドラゴン様がお待ちです。今回は炎を使えるようになってもらいたいそうです。明日の戦いでも使うでしょうしね。仕えるのに越したことはないですね。」

「そうだな。ぜひとも習得したいものだ。そういえば、作戦の準備は終わったか？」

「抜かりないと思いますよ。何せ“F”がしていますからね。彼は完ぺきにこなす男ですから。ただ自分で考えるのが苦手ですね。」

「人には得意なものもあれば不得意なものもあるからな。できれば、冷静に対処できる副官がいればな…。」

「……………すみません。」

「いや…すまん。俺が頑張ればよいことだったな。じゃ、行くとするか。」

俺は將軍になって与えられた何もない部屋を後にした。

「さて、やるか。」

「そうですね、時間もあまりないですしね。」

「では、まず説明するぞ。前に言ったように皆能力自体は持っているんだ。身体に急激な変化または心情の変化があった時に覚醒するといわれている。お前は1つ覚醒した。もう1つを覚醒するために同じようなことが起こらないといけない。まあ、そこでだ。今回は少し遠出をする。馬は乗れると言っていたから、ずいぶん楽に行けるな。王様としてあいさつもしなくてはならないし、ちようどよい。ということだ。分かったか？」

「わかるわけがないでしょ。何しに行くんですか？」

「言ったら覚醒しないだろ。だから、早い話が黙ってついてこいってことだ。」

「初めからそう言ってください。」

「じゃ、ラリー行ってくるよ。」

「分かりました。お二人ともお気を付けください。」

今回は危険なこともないらしい。久々にのんびりとできそうだ。

とそんなことを思っていたが、その出来事にひどく驚くことになるのだった。

第1章終話（後書き）

一応、將軍なったということで第1章終章ということになりました。
いかがでしたか。

たくさんの方が読んでくれるのでとてもうれしく思います。
感想お待ちしております。

第2章第1話（前書き）

遅くなりました。

第2章第1話

第2章第1話

近いつて言っていたが嘘でしょ：ここまでだいぶ来たよ。それよりも気になるのが舗装されていない道だということ。今まで歩いてきた道は土ではあったがその上を何かでしっかり固めていた。完全に土を固めただけかもしれないが：。でも雑草もないんだから、違うものだよなおそらく：。俺は間違っているのか：。なんかよくわからなくなってきた。

「どうした、シヨウ？せつかくの気晴らしだぞ。もう少し考えことはやめたらどうだ？」

無理でしょ。明日は戦いだし、今からわけわからない所に行くし、緊張するしかないでしょ。

「何だ？その眼は？肝っ玉が小さいな。もう少し堂々としていたほうがいいぞ。普段もだが：。しかし、戦いでは冷静だったらしいじゃないか。感心したぞ。」

「お前なあ：、素人にいきなり指揮権を渡すってのはどうなんだ？さすがに昨日は疲れたぞ。」

「うーん：、それはな単純に言うとあまり考えさせないようにしていたんだ。こんな国王

でもやっていると見えてくるものがたくさんある。それが親父が死んだ時だった。俺は親父が国王をやめて引退すると聞いた時、体の調子が悪くなってきたというのも聞いていたし疲れてきているというのも聞いていた。だから俺に引導を渡し、そして俺を指導しているのだと思っていた。しかし、親父は実際には全く違うことを考えていた。それは、完全に政界から引退することだった。理由は『俺

の時代はもう終わった。』だった。実に簡単ではあったが、少し悲しかった。尊敬してきた親父もこんな風になってしまったのかと思った。そのあと親父は眠るようになってしまった。親父を埋めた後に俺が憂いているとき、お前が降ってきたんだ。その時に分かったのが違うことを考えるということだった。あの出来事で助かったよ。その点で感謝している。」

「でも、戦いに出すのはひどくないか？」

「ハハハ、まあそれは誤解だよ。あそこまで露骨に行動に出るとは思っていなかったんだ。すまないな。」

「そうだったのかよ。本当に急だったんだな。」

「さすがにあせったよ。どっちにしてもいったん止まろう。」

「どうした？」

「ここから10分のところに目的地がある。実は王族だけに許された神聖な土地であるとされているのだが。これは故意に行っているのだが、事情があつてお前は来たほうがいいということになった。というか俺が考えた。お前がどうやってここに来たのか、これのことを皆知らないから反対されたが、俺は正しいと思っている。一応それなりの覚悟がいる。大げさで悪いが、ここはそういう場所だ。入りたくなかったら入らなくてもいいが、その場合はここのことを誰にも言わないでくれよ。さあ、どうする？」

「どうするも何もお前が来いって言ったんだから来たんだ。いまさら帰ろうとは思わないよ。」

「そういうと思ったよ。だから、連れてきたんだがな。さあ、行こう。ここからはおしゃべりは禁止だ。」

確かにここからの景色は違うと言わざるを得なかった。道自体も変わったが、何よりも雰囲気と木の種類が全く違うようだ。木の大きさが半端なくでかい。屋久杉とかといい勝負じゃないか？今までの

木は普通の木だったのに……。しかも、今まで聞こえてきた鳥の音が一切聞こえなくなった。物々しいというか何か未知の生物がいそうな気が……。もしくは幽霊の類か？それよりも何にも驚くなつたことが少し悲しい。今なら、玲から結婚を申し込まれても冷静に考えそうだ。

そうこうしていると、目的地が見……

「何だ、このばかでかい洞窟は？」

「行くぞ、ついてこい。」

この洞窟には圧倒される。高さが3階建てのビルぐらいある。横もそれぐらいかな。どちらにしても気味が悪い。こんな大きさの生物がい……………

「こんにちは。初めてですね。私の名はスカライド・ドラゴン。新しく国王に就任いたしました。今からお世話になるかもしれないので、よろしくお願いします。できれば、今は国内が安定していないので、詳しい話は後ほど……。こちらは「話は分かった。親父殿と一緒にでよい。というよりもメンドクサイ。面白い話があるなら聞いてやるが……。そっちのほうで壁に貼りついて、しかもおびえて声が出ていない男は誰だ？」

「ヒスイ・ショウです。今回はスカライド様に御助言をいただきましたと思います。」

「何だ……………、こんな大きなオオトカゲは？」

「ほう…お前は俺の全体が見えるのか？」

「何いってんの？ドラゴン、見えてるに決まっているんじゃないか。」

「おいおい、俺がしゃべっているわけではないぞ。あっちを見ろよ。あのお方がしゃべっているんだよ。あの方の全体が見えるのか？」

「あのトカゲがしゃべっているのか？マジかよ…。」

「おい、さすがに私も起こるぞ。見たことないわけではないだろう。」

「すみません。こいつは異世界から来たんです。」

「異世界？それは本当か？」

「ええ…。さすがに翼のない人間が空を飛ぶことはできませんからね…。上空より降ってきた男ですから。それよりも話はここからなんです。まずはこの者を異世界に送ることはできませんか？」

「いや、それが本当だとしてもできないだろう。この世界の者は皆「転移」の能力にあこがれてはいるが、2000年ぐらいいも生きてきたがそんな人間はいなかった。おそらくではあるが、異世界から来たという人間は聞いたことがない。無理ではないかな。」

「予想はしていましたが、やはり残念ですね。今回ばかりは彼にお世話になったので恩返しと思ったのだが、なかなかうまくいきませんね。それでは彼の能力が二つあるのでそれを引き出してはくれませんか？二つ目は難しいといわれていますので…。」

「まあ、良いだろう。異世界から来たというのはなかなか驚いた。彼にはいろいろ伺いたいものだな。どんな暮らしでどんなことが行われているのか、非常に興味がある。人間だけの世界なら面白いのだがな。」

「彼は2日前に来たばかりでして、話は聞いていないですよ。」

「じゃ、また今度にしよう。だが、一つ目の能力が分かった。」

「何です？」

「暗闇でも昼間と同じように見ることができることだ。」

「そうですか…。今回の戦では夜間になりそうで、ちょうどよかったです。」

「もう1つの能力は分かっているか？」

「いや、炎が具象化しまして…僕の予想では炎を扱うことができるのではないと。」

「そうか…では、やってみるとしよう。シヨウ、早くこっちに来い。」

「ハイ…」

思わず、声が裏返ってしまった。そんなには対応できないよ。一軒家よりもでかい生き物なんて今まで見たことがない。こればかりは衝撃がでかい。どちらにしてもこちらに敵意はないみたいだし、何よりドラゴンが普通に喋っているから安全なんだろうが…

「そういえば、ドラゴンよ。ヘントはどうした？ 国王の代替わりならあいつがいるはずだが？」

「いえ、親父は先日なくなりました。」

「そうか…。人間命が非常に短い。いろいろなものを生み出して繁栄をするが、その者はすぐに死んでしまう。わしらと同じ知能を持っているから、話すのには面白いのだが、こうも早く死ぬとな…。奴はなかなかおもしろかったので気に入っておったがの。残念じゃ。気を落とすでないぞ。ドラゴンよ。今生けるものを守るのが一番大事じゃ。」

「はい。分かっております。すみませんが、時間が迫っているので…。」

「そうか。では急ぐとしよう。俺の体に触れるがよい。」

「…わかった。」

「うむ…。これは…。ドラゴンよ、後悔はしないな？」

「ちよっと待ってください。それはショウウに聞いてください。」

「そういう意味ではない。お前もかなりの能力者だ。ここ100年見ないほど。だが彼はそれを超えるかもしれん。使い方によっては…。」

「そうですか…。ということは…」

「そうだ。彼が暴走したら止めることをできるのはお前だけだ。特性から見ても。」

「分かりました。」

「もう良いぞ。シヨウ、炎を連想して見よ。」

そう言われて俺は燃え盛る炎を連想した。

『ゴオオオオオ』

自分の右手から炎が燃え盛っていた。しかし、それは普通とは違う色の炎だった。色が四色に見える。青、赤、白、そして黒。なぜだろうか？この炎を見ていると懐かしい感じがする。自分自身を見ていたあのころに…。

「成功だな。おそらくその四色の炎はシヨウ自身の連想によるものだ。効果は一緒だろう。どちらにしても、その力を使いこなすのだ。能力は自分自身が特性を知り、様々なことに利用することで生かされる。燃やすだけでなく、水などをかなりの炎で熱すれば爆発する。空気を燃やせば風が起こる。使いこなせば周りの人間もそれなりの敬意をはらう。そうだろう？ドラゴンよ。」

「ええ……。」

どうやら、ドラゴンはリーダーシップや武力だけでなく、能力があるらしい。

「俺の能力は氷だ。水とは違い、すぐには爆発しない。だからこそ、お前の能力の天敵となる。幼少のころから訓練を行っているから、シヨウには負けないだろう。訓練にも最適な人間だな。いやー、訓練が楽しみだ。」

「そういうところは似ておるな。まあ、早く帰って訓練をするのだな。では、私も寝ることにしよう。酒はそこにおいて行け。」

「はい。分かりました。」

「お邪魔しました。」

そう言って俺たちは出て行った。あの樽は酒だったのね。重たいはずだよ。

「さあ、荷物もなくなったことだし、早く帰ろう。そして訓練をしよう。」

「お前加減しろよな。」

「何言ってんだ？するわけないだろう。手加減したら、実践では全く役に立たないではないか。もちろん本気でいかしてもらおう。面白そうだ。少しは粘れよ。」

素人相手になんてこと言ってるんだ！！どちらにしても道中もこの能力を使おう。早くなれないとドラゴンに殺されそうだ。

そう考えながらも、道中は炎と自分が負けるイメージしかできなかった。

第2章第1話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

これから新しい章になります。

戦いの場面が多くなると思います。

感想お待ちしております。

第2章第2話

「さあ、今日もいい天気だ。絶好の遠足日和だ。まあ、皆は出陣するわけだが……。しかし、今回は前回と違って強大な敵だ。全員が死なないとは言いい切れないな。俺も。だがな、今までとは違うのは俺たちもだ。初めて国王そして王子以外の者が独立して指揮を執る。これはこの世界に新たな文化を与えることになる。歴史的一線にお前たちは参加する。それは名誉だ。そして我々が勝利する。進めー！逆族を討てー！」

『ウオオオオオオ』

もう少し、何とかいうか良い演説があつたはずだ。と俺は思いたい。これでよく指揮が上がる。実際にはお祭り騒ぎだが：

「うまくいきそうですか？能力は。」

「そうでもない。まだ制御が効きにくい。自分自身はちゃんとしてるつもりだが、思ったよりも能力が強いらしい。」

「それは何よりで。」

「何か棘があるな。」

「そりゃ僕は能力が使えませんからね。ドラゴン様にもよくぼこぼこにやられましたよ。っていうか皆ですな。將軍みたいに同等の力を持った人間なんてそうはいませんよ。それにしても今回の作戦にはびっくりしましたよ。おそらく相手は気づいても防げないでしょう。」

「そうかもな……。だが、早くに持つ場に着かなければ確実に負けるな。それぐらい分かっているだろう。」

「そうですが……。完全にこちらのほうが数は上ですよ。負けるわけないでしょ。」

「だからこそ危ないんだよ。こういうときに負けたら士気が格段に落ちる。負けは確実だ。分かったら皆を戒めてこい。」

「分かりましたよ。では、行ってきますよ。ラリーさんといちゃいちゃしないで下さいよ。」

「するわけないだろ。さっさと行け。」

そう言いながらも若干照れていた。なんか殺気がひしひしと感じられるんだが…。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。予定通り行きそうか？」

「少し遅れています。なれないものを持っているせいでしょう。しかし、敵のほうも遅れているようです。なので問題ないかと思っています。」

「駄目だって。予定通り就くことが大前提だから。なんか皆落ち着きすぎでしょ！もう少し機敏に動けないのか？」

「何といえますか…その…練度が足りていないせいだと思います。」

「いや…国王軍だろ？」

「今回みたいな戦は50年以上も前でして…小競り合いぐらいしか起きていないので、経験自体が初めてです。おそらく各国も同じなので条件は一緒かと…」

「だから、相手も遅れているわけか…。どちらにしてもそろそろ休憩をとろう。速度があまりに落ちすぎている。体力もなし練度もなし、これで作戦がともに発動できるのかな？」

「すべて將軍のせいにすることはできませんが、將軍の手にかかっているといったほうがよいでしょう。今回は反乱戦のときに戦った者を10人隊長にしています。おそらくは信頼を得ているので実行されると思いますよ。副長の彼もいますし、万全です。」

「帰ったら訓練だ。ラリー準備しとけよ。」

「休ませてあげたほうがよいかと…」

「駄目だ。経験があった後のほうが一番効果が上がる。」

「そんなもんですかね……。どちらにしても能力のほうはどうになりましたか。」

「お前たちは同じことを聞くな。まだまだ制御が効かないよ。しかし、火をつけることぐらいはできそうだな。暴走すると止まらない。今回の戦いでは使わないようにするつもりだ。」

「すみません。失礼します。今のところ行軍は順調です。そろそろ昼時ですので休憩をしてはいかがかと……。」

「よし。じゃあ、休憩をとろう。」

「はっ。後、敵軍のほうで少し何と言いますか……。」

「どうかしたのか？」

「ええ……。ギュスターブ13世が出陣しているとのうわさがあります。」

「例の一族か？」

「そうなんです……。どうも正妻ではないようであまりいいうわさを聞きません。しかしながら力はあるようで……。一応、耳に入れているともうと思っています。」

「分かった。どちらにしても今回の目的は敵軍を引かせることだ。実際に戦うかどうかは今分らないな。13世の噂は広めないようにしろ。武力に秀でたものが2人いるとなると策略・士気に関わる。しかし、ラキアス将軍以外には伝えておけ。」

「いいんですか？　こういうことは後でうまく使われる可能性がありますますが……。」

「馬鹿か！　今は勝つことが重要だ。これから先のことは勝ってから考えろ。」

「分かりました。そのように……。」

「全く……。」

「そう言わないでください。ゴラン自身、初めての副官ですから緊張しているでしょう。」

「フー、どっちにしても今は早く配置につくことが重要だ。これが

できなければ全面衝突になる。」

「ようやくついたよ。」

「そうですね。」

「ゴランどうだ？ 配置はできたか？」

「もちろんです。我々に拔かりはありません。ただ…。」

「分かっている。そこはしょうがない。各将軍に任せろ。」

「敵軍は来たか？」

「はい。ここから30分ぐらいのところにいるようです。今回は相手はこちらの出方を見ているようです。」

「予定通りだな。相手はギュスターブ何世だ？」

「12世です。先ほどの13世も一緒のようです。」

「分かった。俺らから動くことにするか…。」

第2章第2話（後書き）

すみません。少し短いです。

次が戦いになります。

感想お待ちしております。

第2章第3話（前書き）

遅くなりました。

第2章第3話

「さて、相手はどう来るかな？」

ギュスターブ10世は遠くに見える軍勢を見ていた。

「今回は新しい将軍が出陣しているようです。城内戦では拔群の働きを見せたと噂されております。」

「ほう…。あの城は攻めるのが難しいはずだったが？」

「ええ、死者を10人で制圧しました。」

「なかなかやりそうだ。最近が強そうな奴がいなかったからな。面白そうだ。」

「将軍、油断なさいませんよう。」

「分かっている。お前が俺にそれを言うとは成長したな。」

「それが副官の仕事です。」

「ふん。出てきたな。なめてる。正面突破とは。ちょっと揉んでやるか。軍を進めろ。」

「よし。作戦を実行する。問題は10世に気づかれないことだ。まずは第1陣弓矢兵を前へ。おい、ちゃっちゃと並べよ。」

「将軍、落ち着いて。」

「ゆっくりやったら、相手にばれるだろうが！」

「並びました。」

「よし。行くぞ。全員突撃！！！」

『進めーーー』

「弓矢兵が突撃してきたな。相手は兵法を知らないと見える。騎馬兵前へ。突撃開始。」

「弓矢兵止まれ。マキビシをばらまけ。歩兵隊前へ。槍袈を作っておけ。違う。少し後退気味に陣を引かせろ。第1陣弓矢兵、引け。第2陣弓矢兵、発射用意。」

「なんだ？弓矢兵が引いた？あれは砂煙がたってよく見えんな。この距離ではもう行くしかあるまい。」

「第2陣弓矢兵、放て！歩兵隊、槍袈用意。」

「何？全員止まれ。」

しかし、実際に走っている馬を止まらせるのは容易ではない。それも大軍では。彼の言葉はくしくも味方には届かなかった。

『ヒヒーーン』

最初の一頭が倒れ、それに巻き込まれ、さらに後ろから…巨大な玉突き事故になった。

「騎馬隊は崩れた。生きている奴にとどめをさせ。歩兵隊、突撃！」

「いかん。騎馬隊が囲まれた。助けに行くぞ。弓矢兵はここに待機。それ以外は全員突撃！」

「しかし、将軍。」

「弓矢兵は機動力が低すぎる。行くぞ。味方の仇をとれ。」

「ショウ将軍、敵軍が！」

「分かっている。弓矢兵、発射準備。合図を待て。いったん歩兵隊を引かせろ。そこに弓矢を浴びせる。そして、三面から歩兵隊を強襲する。残っている歩兵隊は突撃準備。騎馬隊を左右に分ける。ラリーは左、ゴランは右だ。準備をするぞ。」

「歩兵隊、盾を準備しろ。弓矢から身を防ぎつつ前進。残っている騎馬隊を出す。左右に分けて、歩兵隊を守れ。弓矢兵を後から付いてこさせろ。相手の伏せ兵に対処する。」

「発射！」 「突撃！」

ついに始まった、戦争が。初めは良かったがここからは乱戦になる。おそらく次が最後だろう。

「弓矢兵発射準備、騎馬隊突撃準備、発射の合図とともに俺に続け。弓矢兵は発射を終えたら剣を持ち、歩兵を援護しろ。よし、発射。俺に続けー！」

もちろん俺は歩兵につく。前線を回復させる。

「うおおおおりゃ。」

1人2人と首をはねていく。しかし、その分味方も倒れていく。剣

の音が激しくなった。どうやら、強襲は失敗したらしい。

「お前が大将だな。打ち取ってやる。」

そう言って、彼は剣を刺してきた。

「甘い。」

それをよけて、首筋を切りつけた。

「全員、固まって倒せ。無理に突っ込むな。」

『オーーーーーー』

しかし、人数が少ない分、圧倒的に不利だ。こちらは3000。よく耐えたと思う。

「ショウ將軍、11世をおびき出すことに成功した模様です。」

「よし、退却を開始する。弓矢兵には伝えたか。」

「すでに伝えてます。」

「今すぐ退却だ。山のほうに逃げろ。」

「將軍、敵軍が退却します。山のほうに逃げるようです。」

「よし、追え。山はまだ遠い。その間につぶせ。突撃。」

『ワアアアアアアア』

「やばい。早くしろ。」

「準備整いました。」

「やれ。そして、撤退。」

「將軍またマキビシです。」

「気をつけて進め、相手もあせっている証拠だ。」

「くそっ、大した時間稼ぎにはならんか…。」

「でも、こちらのほうが策が成功しそうです。」

「余裕があるほうがいいに決まっている。今回はそこに助けられそうだな。」

「くそ、思ったように進まん。」

「仕方ないでしょう。足元を見ながらだとなかなか走れませんから。」

「もう少しでマキビシもなくなるだろう。ようやく、仇を討てそうだな。ん？あそこにいるのは13世ではないか？」

「そのようですね。まさか、本当に出るとは思いませんでした。まだ17歳のはずですが…。」

「まあ、いまさらとめれないな。死んでくれたら、後継ぎ問題が楽になりそうだが…。そういえば兄貴はどこだ？姿が見えないが。」

「おそらく10世將軍のところにいるはずです。頭に血が昇りやすいですから。」

「それもそうだな。とりあえず、まずは前の敵のせん滅だ。彼を倒せば、この戦いは終わる。」

「くそ、待てー。臆病者。お前らは正々堂々勝負もできないのか？」

「言わせておけ。本当にあいつは使いやすいな。」

「しかし、ギート將軍大丈夫ですか？追いつかれるような勢いですが？」

「心配するな。もう少しで奇襲地点だ。うまくいくだろう。」

「あの馬鹿な弟共め。このままではまずいぞ。11世はともかく、12世は完全に罠にはまっている。あいつは1万の兵がいるが、今はだいぶ減っている。よし、決めたぞ。12世には援軍を7500、11世には2500を送る。」

「しかし、それはあんまりでは？」

「いや、これで大丈夫だ。11世ならば、奇襲ぐらいなんとかできる。12世のほうはきついな。よし、マキビシを集めるように言うておけ。相手の策を利用させてもらう。」

「もう少しだ。皆頑張れ。」

さすがに逃げるのが難しい。あと少しで合流地点だ。

「逃がすか、マキビシもなくなった。追いつくのは時間の問題だ。」

「放てーーーーー」

『ぎゃー！』

『敵襲——』

「くそ、こんな罠にかかるとは……。しかし、あの量の大軍となると戦えん。変えることもできないな。」

単なる伏せ兵である。砂埃が深かったために離れの軍隊に気づくことがなかった。というよりも前に集中されていた。それが行けなかった。しかも後ろにはさっきよけてきたマキビシがある。

「仕方がない。正面突破だ。皆、進め——。あの者を打ち取ったものは褒美をとらせる。いけ——。」

左右からの攻撃によって、動くに動けなくなったギユスターブ12世は前進しかできなくなってしまったのである。

「いいタイミングだ。これで、森の中に入ることができる。」

「自分で言うことだけはありますね。ラキアス將軍は。」

「そうだな。そんなことより、作戦はいいか。」

「もちろんです。皆、分かっています。ゴランも行っています。もう少しましょう。」

「よし。森の中に入って敵をまくぞ。」

『ウオオオオオオ』

何とかなりそうだ。森の中に逃げればこっちの勝ちだ。後は流れに任せればいいだけだ。

「よし、皆入ったか？」

「はい、撤退完了いたしました。」

「火計をする。100人だけ残って、ほかはラキアス將軍の援護に

回れ。かえって、邪魔になる。」

「はっ！」

「始めろ。」

この国にはガソリンなんてものは存在しない。だからこそ、ゴランがしたように火をつける準備が必要なのだ。昔はこうやって火を起こしていたんだろうな。

「將軍、火が伝わっていくまで時間がかかります。」

「もちろん、皆、弓の用意をしろ。ここに來た敵軍を待ち伏せする。そうしている間に火が回るだろう。全員配置につけ。」

どう考えても相手が待ち伏せしているとしか考えられない。こうしたのも自分のせいではあるが、制御ができないのがつらい。こうしたいと思ってもそれを先読みされている。そんな気分になってしまふ。後退の指示を出したとしても、マキビシがあるためすぐには撤退できない。そうこうしている間にも左右からの弓矢によってかなりの被害が出るし、回り込まれたら終わりだろう。

「將軍、ここは引きましょう。」

「俺もそれがいいとは思っているんだが……。」

「申し上げます。森に火を付けた模様です。」

「そうか……。被害はひどくなるが、撤退しよう。」

「相手は撤退する模様です。」

「分かった。俺たちは追撃に出るぞ。俺についてこい。」

「申し上げます！敵兵100人が我が軍と戦っており、前に進めない状況です。」

「俺が行く。相手は誰だ？」

「ギュスターブ13世です。」

「くそ、やるな。今から出て行っても討たれるだけだ。前に進んだほうがいい。」

「大丈夫か、ギュス。相手は強いと聞いているぞ。」

「だからこそ隙が生まれる。そうだよな？トール。」

「そうだ。おそらく彼らはここに守りをあまり置いていないはずだ。」

「言ったとおりだろ。従えよ。スティー。」

「分かったよ。」

「お話のところ悪いんだが…」

「「「ばっ」」」

振り向くと相手方の将軍がそこにはいた。

「全員投降いたしました。」

「すまないな。であそこにいる3人が隊長か？」

「おそらく、ギュスターブ13世と思われます。」

「分かった。皆には脅しだけと伝えろ。」

「はい：將軍お氣をつけて。」

「大丈夫だ。」

「お話のところ悪いんだが…」

そんなに驚かなくても…ふつうは気づくよ。

「貴様はヒスイ・シヨウか？」

「もちろん、お前はギュスターブ13世で間違いないか。」

「ああ…。それで、仲間は無事なのか？」

「もちろんだ。こっちで丁重に扱っているよ。分かってはいると思うが：投降する気はないか？」

「ないな…。」

「じゃあ、話を変えよう。俺のもとで働かないか？」

「何を言っている？俺は敵だぞ。敵の中で働けるか！」

「そうは言っても、お前はあちらではあまり好かれていないようだな。実際に今回も助けに來ないだろ。」

「そんなこと分かっている。これから、俺たちは…。」

「国を作るか？反乱をおこすのか？今の世界じゃ、お前は何か一つできない。だったら、俺と一緒にメドール国を新しく作っていかないか？」

「……………悪くない話だな…。だがな、俺はこの腕っ節で成りあがってきた。弱い人間には俺は絶対に従わない。」

「だったらやってみようか。」

「將軍！」「ギュス！」

「俺たちなら大丈夫だ。それにもうすぐここも燃えるだろうからな。早く勝負をつけるよ。」

「それは俺のセリフだ。」

「分かりました。」「分かった。」

そう言いながら、ゴランを先頭に森を抜けていった。

「さて、邪魔者もいなくなったしやりますか。」

「調子に乗んなよ。勝つのは俺だ。」

「そういえば、お前が勝ったらどうするんだ？」

「俺と一緒に国を立ち上げてもらう。」

「そうか…、面白そうだが、国王様との約束があるからな。俺のほうに仕えてもらうぞ。」

『ガキンッ』

彼らの剣音が響いた。

「ええ、退却した模様です。」

ラキアスはどちらにも援軍に行けるように一番上の高台に見張り台を建てていた。

「そうか、引き際はちゃんとしている。どちらにしてもこちらのほうが数が上だし、一軍団でも負ければしんどくなるからな。それにしても、追撃はしなかったのか？ あちらには10世がいないから臆することなく攻めるはずだが…。」

「いえ、できなかったそうです。なんでも橋の向こうに敵軍が見えたからだと言っていました…。こちらからは全くとっていいほど敵軍はいなかったのです。」

「……もしかしたらもしかするな。考えられなくはない。国王様への報告に追加しておけ。今回の戦にて能力が使われた可能性がある。」

「弟よ大丈夫か？」

「10世お兄！何とか大丈夫。ただ、13世が…」

「分かった。奴のことはしょうがない。ここから退却するぞ。俺たちについてこい。」

『ヒュン、ヒュン』

『グハッ』

「くそ、ここにいたら危ない。全力で走れ。」

「お兄は？」

「少しやることがある。」

「しかし…」

「早く行け。大したことするわけではない。追撃を防ぐだけだ。」

「分かりました。必ず帰ってきてください。」

「分かっている。準備はできたか？」

「はっ！」

「じゃあ、もう一回走るか…」

「手際がいいな。たった少しの間に弟の位置を探るとは…。本当は追撃させたくはないが、將軍としてはそうはいかないな。100騎を向かわせる。少し様子を見てから、追撃を開始する。」

「了解。」

すると、馬が止まった。

「どうした？」

「どうやら、マキビシがまかれているようです。かなり遠くまで続いていると。」

「分かった。このままだと返り討ちにされる。引くように伝えろ。」

「はっ！」

「今回は逃がしたな。次はこうはいかないぞ。」

「申し上げます。シヨウ將軍が敵兵と戦っている模様です。ギユスターブ13世と見られています。」

「何？」

「しかし、13世の配下は捕虜となっているようです。」

「ラキアス將軍、いかがいたしましたしょう？」

「もう少し様子を見てみよう。そこからでも遅くはあるまい。」

あいつめ、少しは状況を考えているのか？俺たちの関係が分かった

ら国王様がどう思われるか…。調べは付いているかもしれないな。

ラキアスは暗きなりつつある空を眺めた。

「ハアハア…」

「さっさとやられやがれ！」

「そうはいかない。約束があるからな！」

『ガキン』

こいつ強い。すべての攻撃が防がれる。それからというもののずつと膠着状態が続いている。能力を使おうにもその隙を一切与えてくれない。

『ズザザザザ』

また、互いに距離をとる。その繰り返しだ。能力を使おうとすれば、突っ込んでくる。もしかしたら…。ならば、

『バツ』

俺は左手を前に出した。

「能力は使わせせん。」

『スッ』 「……！」

甘くなった剣を避けて、胴を切る。

『ズバッ』

「くそ、俺をだますとは…。」

「勝負あったようだな。さて、降伏をしろ。」

「まだだ、俺は負けてはいない。」

「……………」

しかし、あの傷は甘く見ても深くないとは言いきれない。それにもう少ししたら、火が……。気が付いたら、火がかなり回ってきているようだ。これではもう…。

「気がついたようだな…。」

「貴様、これが狙いだったのか…。」

彼がずっと攻勢を続けていた理由、それは火が回っていることを悟らせないことだった。実際には能力を封じさせることを目的といいながら、相手に時間の経過を悟らせない。彼自身が負けても、相手も火に巻かれて死ぬことになる。

「ただ、失敗だったな。俺の能力を見ていないのは。」

「お前、まさか…。くそっ、！！！」

足にきているようだ。だが、

「よく立てたな。」

「次が最後だ。行くぞ。」

『キイン、グサ、ドサッ』

「ハアッハアッ、たく、無理しやがって！」

相手は剣を持ってないぐらい。傷が深かったらしい。とりあえず、早くここからでないと。しかし、こんなに火が回ってはい…。そういえば、ドラゴンはい…。やってみるか、

「ウオオオオオアアアアア。」

能力の解除を応用すれば、火自体を消すことができると思ったのだ。解除の方法も意識して消すようにするのだからできるはずだ。

「火が消えた？ 一体……！！ 將軍、大丈夫ですか？」

「ハア、ああ…、ハア、大丈夫だ。」

気が緩んだのか、俺は皆が来るのを見ながら、意識を失った。

第2章第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

全体の編集を行いますので、少し投稿が遅れそうです。

感想等お待ちしております。

第2章第4話

「なんじゃこりゃー！ー！！！！！」

俺はそう叫ばずにはいられなかった。

俺が目を覚ましたのは2日後のことだった。自分自身で能力と同系統のものを吸収するという概念はなかったらしい。ドラゴンのやっていたのは吸収ではなく、水を氷に変えるために水分を吸収したというよりも温度を下げて集めていたということだ。過去に使われたかもしれないが文献に残っていないとやはり初めてということになる。目を覚まさなかったのは単なる疲労と能力の酷使によるものだろうと判断された。その後の検査でも両方の能力ともに使うことができたので、今後でも使えるだろう。どちらにしても、今から負傷者を見舞って、声をかけたほうがよいだろう。

「ちょっと、何をしようとしているんですか？将軍様？」

「いえ、もう大丈夫ですので退院しようかと…。」

「そうですか…、少し歩いてもらえますか？」

「！！！！！」

歩くどころか立つことさえもできない。

「能力は集中さえ途切れなければ疲れていても使うことができますが、もちろん体は違います。おそらく、明日にでも退院できますからおとなしく寝てください。分かりましたね？」

「はい。」

そうして、俺はもう一日ここにどまった。

次の日、ゴランとラリーが迎えに来てくれた。

「どうでしたか、病院というところは？ 入ったことがないので分かりませんが…。」

「ゴランは病院に来たことがないのか？」

「いえ、来たことがあっても検査など受けたことはありませんから…。」

「まあ、来ないほうがいいな。」

「どうでもいいです。そんなことは。とりあえず、病院にいるギュスターブ13世を見舞いに行きましょう。実際に会って、真偽を確かめましょう。」

「そうだな…。副官としてもいいんだが無理強い駄目だよな。とりあえずドラゴンに会ってみないと…。」

「大丈夫ですよ。もう会うことにしています。これから国王室に行ってもらいます。」

「分かった。」

「どうだ、体は治ったか？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも話があるんだ。」

「もしかして、あの変わったアホたれか？」

「それはあんまりだろ…。一応、皇太子だと思うんだが。どちらにしても、直情的の典型的な戦闘狂だが、能力がある。実際に彼の部下には頭のいいやつもいるし、実戦部隊に使えるそうだ。」

「そうなのか。どっちにしてもそれには俺は反対だな。相手方の国に戦争の口実を作るようなものだから、国王としてはな……。どうしてもというのなら考えなくもないな……」

「いい方法を思いついた。彼らを傭兵として雇えばいいんじゃないか？」

「それがいい。彼らの意思をくみ、いつでも解約できる職業だから大丈夫だな。話は変わるがそろそろ話すか……。“D”と“F”についての話しよう。分かっているとは思うが、お前のところであつて使われた文字で間違いないな？」

「それは俺の世界のことか？」

「そうだ。伝説ではそうになっている。あのドラゴンも知るわけはない。本を読まないからな。実際にはこの世界の人間はお前たちの世界から来て移住したといわれている。」

「それは本当か？」

「本当だ。そして、この世界の国々を支配し、奴隷にした。それが3000年前だ。」

「じゃあ……」

「この国では異世界から来たものを「支配者」と呼ばれるがここに来た瞬間に殺されることになっている。」

「分かったな。この国は支配者からできた国であり、俺らはその流れをくんでいる国だ。俺たちは名目上支配者の代わりに今、国王として統治をおこなっている。しかし、3000年もたつにつれて話がねじ曲がってしまった。各国では奴隷にしたと伝わっているが、それは嘘で実際は「支配者」が建国して間もなく病気になる。その家臣の1人が1人演技を行って、「支配者」をだまし打ちしたんだ。「支配者」は皆とともに政治を行っていたんだ。今よりもずっと健全な状態だな。「支配者」が死んでから、奴隷となっていた国々が争い、今の状態になったということだ。真実を伝えていることで我々の国では即座に国王となってもらおうとしてはいるが、今の段階では国力が低すぎる。どういうことか分かったな。」

「いずれは俺が国王に…？」

「当然だ。そのために俺たちがこの国を守ってきたんだ。そして、いずれは周りの国々と戦争をすることになる。」

「そんな…。伝説を変えるだけでいいんじゃないのか。そうすれば、戦争は…。」

「残念ながら終わることはない。彼らの国の名目は奴隷の解放にある。」

「そういうことか…。この国は貿易をしてないのか。」

「そうだ。奴隷制度を秘密裏に作っているのは彼らだ。今でもよく自国の人間が誘拐され、奴隷となっているという話を聞いている。この国には商人はいない。いるにはいるが、この国のものを売るだけだ。商売といえるほど発展はしていない。A～Fまでの奴らは「支配者」親衛隊だ。このときのために俺が組織しておいた。役に立つとはな。」

「…………。」

「そして、もうひとつだけ俺たちと同じ国がある。それがお前が副官にしたいといったギュスターブの国だ。」

「？」

「ギュスターブの母は正妻ではないというのを聞いてないか？」

「いや、そうだが…。」

「彼女はジャン国の姫君だ。まあ、悪く言うと人質だ。今回でそれがどうなるかは分からないが…。つまりところ時間の勝負となる。彼女が自殺でもさせられたら、ジャン国は滅びる。だからこそ、お前にはこれから最前線の地方の領主として派遣する。というよりも分け与えるということだがな。一応は將軍だし…。ただし、まだ親衛隊には話をするなよ。完全に防備が固まり、そしてジャン国との連携が取れてからだ。」

「分かった。」

「誘拐が頻繁に起きるぐらいだ。ずいぶん荒れている。十分気をつけろよ。」

「……………」

「大丈夫か？」

「俺が国王とはな。」

「心配しなくていい。もし、やりたくなかったら、違うようにもできる。」

「そうなのか？」

「ああ。だから、大丈夫だ。どっちにしてもお前たちの人たちが原因で誘拐が行われているなんて嫌だろ？頑張ってくれよ。親衛隊はもちろんお前について行くからな。」

「もちろんだ。俺が行くからには徹底するよ。」

「よし。」

「じゃあ、明日には出発しろ。」

「話は終わりましたか？」

「ああ、ケーマという地方に赴任することになった。」

「マジかよ…。」

「どうしたんだ？」

「あのですね、あそこではなんでもありでして…。まあ、行ったら分かります。」

「不安だな。まあ、それは楽しみにしておくよ。それよりも、ギュスターブのところに行く。ゴランは明日、出発だから準備を頼む。国王から書状があるからこれを持って準備をするようにということだから。」

「ええ、では…。」

……そんなに嫌なのか

「ゴランのことはほっというて行きますよ。」

「さて、決心はついたか？」

「決心というよりも何も約束だろ？もちろん、あんたについて行くさ。」

「しかし、ちょっと事情があつてな。約束通りにはなりそうにないんだ。」

「それは難しい話みたいだな。スティー、頼んだ。」

「はあ…。」

「いつもこうなのか？」

「ええ、まあ…。話とは何でしょう？」

ドラゴンと話合った内容を話した。俺が「支配者」であるという部分を外してだが…。

「そうですか、分かりました。彼にも伝えておきます。我々はジャン国のものではありませんが、皆孤児ですので一緒について行ってもよいですか。」

「もちろんだ。よろしく頼むよ。」

「なんじゃこりゃー！ー！ー！ー！！！！！！」

「これが將軍の小屋です。」

「なめんでんのか。この野郎。」

これは城とはいわないぞ。完全に少しでかい廃墟だ。ツタが全部覆っているし、しかも木が全部腐ってる。しかも、野良犬がたくさん住んでいるぞ。ここまですらでもそれが十分に分かる。人間が住める場所ではないだろ。

「旦那はここにすむのか…。先が見えるな。」

「なんだとてめえ。」

「まあまあ、將軍。ププッ」

「笑うんじゃねえよ。さっさと中に入るぞ。」

『バキッ、ドサッ』

階段が壊れて、俺は落ちた。

「將軍、大丈夫ですか？」

「ああ…。」

「よし、テントを張るぞ。」

「將軍はあっちでしょう？」

「俺は絶対にあそこには住まない。明日から簡易的な家を建てるぞ。」

「

第2章第4話（後書き）

どうでしたか？

文字数が少ないですが、内容はかなり進んだように思います。

第2章はもう少しあります。

感想・誤字脱字ありましたら、お願いいたします。

第2章終話（前書き）

かなり短いです。

ら早くしましょう。」

ここに集まっているのは俺、ラリー、ゴラン、ギウス、ステイー、トールの五人。できれば七人はほしい。俺が考えている構想よりも若干少ないが、今は兵士が6000人、上場かな。

「では、まずいろんな役職を決める。まず、軍隊を三つに分ける。

総隊長が俺になる。次に副隊長がゴラン、ギウス、ステイー。それぞれ、情報部隊、歩兵部隊、そして弓兵部隊。次に文官長にラリー、トール。会計長にラリー、政治長にトールをやってもらう。」

「具体的には一体何を？」

「文字通りだと思うけどな。後々はだが……。3か月はおそらく何もできないと思うぞ。」

「何もできないとはどういうことですか？」

「いや、言葉が悪かった。軍隊はそれぞれ1000人ずつに分ける。そして、治安を保ってもらおうと思っている。そして、文官長2人は軍隊を使って地図を作り、市場調査、人口調査、人口の年齢の分布、文官の登用、一番大事なのは政令の案を作ってもらう。」

「……………」

どうしたんだろ？皆黙っちゃった。まあ、いいか。

「3か月でこの国を機能させる。皆、頑張ってくれ。」

「はい。」

第2章終話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

きりがいいのでここで区切りました。

感想等お待ちしております。

第3章第1話

あれから一カ月が過ぎた。ようやく基礎というか計画を実行するための下準備ができたところ。これじゃあ、いつまでたっても訓練や文官の登用とかができないな。でも、紙を作る技術があつて助かった。石に彫るわけにもいかんし、木も建物を建てるのに使う。今はとにかく俺ら自身の立ち位置を確保しないと何もせずにここから撤退しないといけなくなる。

「失礼します。」

「ラリー、ツール終わったか？」

「ようやく終わりました。地図のほうは後2カ月かかります。」

「それはしょうがない。かなり詳しい地図を作るんだからな。絶対に間違えるなよ。」

ここにはならず者がたくさんいるので、この住人は安心して暮らせないという状況らしい。俺としてはここまでの都市が国に1か所あるだけでずいぶんとまずい気がするが…。

まあ、そういうことなので今回は戸籍を作ることにした。理由は主に2つ。ここにはつきり住んでいる人たちを調べることと一般人とならず者の違いをはつきりさせることと税の徴収の効率化を目指しているんだが…。何せ俺も初めてだし、日本ではもうできているし、統治だけで今は精いっぱいだな。

「それよりも戸籍をまとめたものがあるな。」

「おおよそですが、ラリーさんにまとめてもらいました。て言うか將軍、鬼ですよ。こんなに仕事をしたのは初めてです。最初の1週間は2日に1回徹夜でした。少しは休ましてほしいです。」

「分かった分かった。気が向いたらな、考えておくよ。それよりも

ここの町に自警団があるとは思わなかったな。軍隊に入る気はあるだろうか？ 2万人増えればかなり楽になるし、公共事業もできそうだな。城も作ることができそうだな。まだまだやることがたくさんあるぞ。2人とも喜べ。」

「素直に喜べません！」

「まあ、冗談はこれぐらいにしといて、この二つは問題だな。医療施設の不足と盗賊の被害額。すごい！ たぶん、この国の1年分の税金ぐらい盗まれてるんじゃないか？」

「感心しないでください！ この盗賊団がいるから人身売買が行われているんですよ。ゴランの報告ではセリが行われていたそうです。しかも、我々がやめさそうとしても平気でやっています。早急に手を打たなくてはなりません。」

「だからこそ、今から会う自警団が軍隊に入ればそんなことはさせないし、盗賊は全員捕まえる。そして、これはあくまで計画だが城を作った後に村をすべて塙で固める。」

「はぁーーーーー。僕は帰国したい気持ちになってきましたよ。重要性は痛いほどよく分かりますが……はつきり言って無謀です。」

「そういうな、トール。いずれはどこかの町に作らないといけないものではあるんだぞ。」

「將軍、ならば他の町に作るほうがよいと思われますが？ 今はこの街に城を作るだけで予算が尽きてします。」

「心配するな。ポケットマネーをもらったからできる。それにこの街が敵国に最も近いからまずはここに作らないとな。」

「ぼけっとまね？ なんですか、それは？」

「早い話が国王さんからもらった褒美だよ。二つの戦で働いたからかなりの額をくれたのではないかと。皆驚いていたし、これ売ればもうかるしうまくいけば盗賊退治にも使えるかもな。」

「ああ……金をもらったんですね……。それはすごいですね。」

この大陸ではおかしなことに金がほとんど国でとれないらしい。その代わり、銀と銅は各国に鉱山があるほどたくさんとれる。地球に戻れたら大儲けだぜ。ククク…。

「どちらにしても金を売れるような商人がここにいるとは思えないですね。どうするのですか？」

「…：そうだった。こんなところじゃ無理か。商人同士の貿易はされていないのか？」

「それはどうでしょうか？ 私には分かりません。」

「僕の家で取り扱いますでしょうか？」

「トールの親って貴族？」

「いえ、商人なんですよ。両親が言うのを信じれば、ここが拠点だったらしいですが、治安が悪すぎて護衛の数だけで赤字になるとか言っていましたよ。現状を見るには昔ほどひどくないようですがね…：どうします？」

「俺としては頼みたいんだが、大丈夫か？」

「大丈夫と思いますが褒美を期待すると思いますよ。一応、商人ですからね。稼ぐときに稼がないとなってな感じです。」

「分かった。じゃあ、この都市に店を作ってやろう。ついでに商人同士の貿易をしてもらいたい方向で。もちろん、お金は出せてもらうがな。それでどうだ？」

「それは、將軍直属の商人となる感じですか？」

「そうだ。味方は多いほうがいい。とはいっても利益が出なかったら俺たちも商業のほうでは手は出さないようにするがな…：」

「金のことは引き受けてくれるかもしれませんが、貿易のほうは分かりません。手紙で送りますので少し時間がかかると思います。では、早速手配してきます。」

そう言ってトールは出て行った。真面目だねー。彼自身は分かって

ないだろうがな…。

「シヨウ將軍、内密な話とは一体何ですか？」

「俺が計画しているのは軍隊のほうだ。内政のほうはある程度、物ができたり、お金がないとできない。しかし、敵は待つてはくれないだろう。今、俺が考えているのはな…」

「本当に作りになるつもりですか？」

「ああ…。時間はかかるし、手間もかかる。だがな、これができれば必ずや役に立つはずだ。」

「ということは私は…。」

「分かっているな。」

「私に休みはないのでしょうか？」

「…寝る暇はあるだろ？」

「…………。」

「心配するな。3年後にはできるんじゃないのか？」

「もういいです。では、行ってまいります。」

なぜかラリーは怒って出て行った。

俺だって結構忙しいと思うんだが……。それにしてももう一カ月か。皆、どうしてるかな？ 失踪願いじゃなくて捜索願か……。出されているだろうな。確かにあっちのほうの生活にはあまり魅力を感じられなかったが、家族や友達、彼女がいたからな。それなりに楽しかった。こっちはすごく楽しいんだが、いまだに1人でいることが多い。まあ、文句言ってもしょうがない。地道に文献をあさってみるかな。それにしてもハンコを押すのが多い。よくこれだけの量を作ったよ。あの二人は。優秀な部下を持つと楽が……。ここ間違えているぞ。

『コンコン』

「誰だ？」

「ゴランです。自警団の総隊長の方をお連れしました。」

「入れ。」

第3章第1話（後書き）

遅くなりました。すみません。

たくさんの方が読んでくださってとてもうれしいです。

感想等お待ちしております。

第3章第2話

「あなたがシヨウ將軍ですか。はじめまして。私はこの自警団総隊長のイアグと申します。この治安も軍隊のおかげでだいぶ良くなったようです。急な見回りが功を奏したようですな。我々にとってもうれしい誤算になりました。」

「そうですか。うちにとっても治安の悪さが問題視されていたので喜ばしいことと思います。これでようやく事業に移すことができそうです。これから治安が良いままであつてほしいものです。」

「こちらとしても“民間”では軍隊のほうを重要視しているものが多くいるものでして、今回はこちらに対しての対応かと存じ上げておりますが？」

ちらっとゴランのほうを見た。しかし、彼は首を横に振っている。早い話が今回、何の通達もなく派遣された將軍と軍隊に対しての常識のなさど治安を保ってきた自警団の仕事をとるような形となった今回の軍隊の動きに対して抗議しているのだ。それにしても言い方がなあ：政治家みたいな感じ。こういう対応の仕方は正直苦手。

「そうであるともそうでないとも言えます。我々が考えているのは自警団の軍隊併合です。」

「それは我々自警団を軍隊として扱うことにするということですか？それとも本当に軍隊にすることですか？」

「お分かりのほうですよ。イアグ殿。今の我々の状況を把握していないなんてことはないはず。言葉は悪いかもしれませんが、あなたは私がこうして將軍としてまた、この領土を支配することを前提にして派遣されたということも分かっていましたね。」

「何を言っているのか、分かりませんが？」

「嘘はあなたのためになりませんよ。もし仮にあなたが私が派遣さ

れたことを知らなかったら、攻撃をした、もしくは確認をすぐにもとろうとするはずです。街に離れた所とはいえ住居をきずき、そこから何かをしようとしているのです。今から1カ月も前の話ですよ。気がつかないほうがおかしい。」

「そうですね。しかし、私たちは自警団です。見つけた穴を掘って蛇を出すようなことはいたしません。まずはどういった人たちかを見極め、害がないようであればほっときます。もちろん税は納めてもらいますけど……。」

「あまりいい対応であるとはいえませんが。街として見ているなら、人の出入りに敏感になる必要がある。この街はお世辞にも治安が良いとはいうことができません。過剰に気にしすぎるのはマイナスにはなるかもしれませんが、住民は安心するはずです。実際には証明書の提示と身体検査、そしてここで何をするか聞くことぐらいしかできないかもしれませんが、それでも十分に効果を期待することができます。二万人もいる自警団なら配置ぐらい簡単にできることです。」

「それは我々が手を抜いていたということですか？我々は一切手を抜いてはいません。」

「もちろん違います。あなた方はいろんな人を招き入れることによって、相手を安心させその間にずっと監視をすることで、盗賊集団を拿捕しようとしているのでしょうか。見ればそのくらいことは簡単に分かります。だいたい盗賊であるやつらが見張られていることにも気付かないなんてありえませんかよ。」

「我々は訓練を怠っていない。彼らに気づかれるなんてことはありえない。あなたたちにでもだ。」

「では、監視を外していただけますかな。私に対しての監視が合計で10人いますね。兵士1人には1人隊長格には5人、盗賊を追うにしては我々に人数を割きすぎている。このままだと平行線になりそうですのはつきり言いましょう。あなた方は盗賊と結託していますね。または援助をしている。それが何かも知らないことですが、

ちょっとお金を盗んだだけではできないようなことを。あなた方は住民をだまして何をしようとしているのです。私はここからあなたを出す気は全くない。むしろこのことを話さないようであれば、王都に連れて行き裁判を行ってもらおうと思っています。これから言うことは証拠として取っておきましょう。それとも、この街がそれほど危険な状態にあるということでしょうか。イアグ殿、話していただけますか？」

「そこまで知っていらいしゃったとは思わなかったですね。どうやってお知りになったのですかな？」

「分かりませんか？あなた方は私たちを監視していたと言ったと思いますか？」

「そういうことですか。あなた方を完ぺきに監視しているはずが我々が反対に監視されていたということですか。しかし、我々が終わるのは夜遅くのはず。気がつかないとはいえ追うのは難しいと思いますが？」

「それは私の能力ですよ。イアグ殿。」

「便利な目をお持ちで。いいでしょう、お話ししましょう。しかし、これは私しか知らないことです。」

「分かりました。ゴラン、下がれ。2人で話すことにする。ついでにお茶を持ってきてくれ。長くなりそうだからな。」

「よいのですか？」

「約束する。私はショウ將軍には手を出さない。もちろん、これらの街の運命は我ら2人が握るかもしれないのだ。ここで対立しては意味がない。」

「そういうことだ。ゴラン、お茶を持ってこい。」

「はい。」

第3章第2話（後書き）

遅くなりました。

徐々に最新していきます。気長に待っていてください。

感想等お待ちしております。

第3章第3話（前書き）

遅くなりました。

第3章第3話

「さて、話をしましょうか。イアグ殿。」

「では、まずどこから話しましょうかね。初めから話しましょう。ことの始まりは20年前にさかのぼります。」

「そこまで行くのか？」

「ええ、父が関係してるんで長くなりますが聞いていただけると助かります。ここの地方は父が納めていました。もちろん、今の状態ではなくちゃんと將軍として王様からここをいただきました。2・3年はここの住民も何1つ問題を起こすことなく過ごしております。しかし、ある出来事がここの町を襲いました。それはダムイ国からの軍隊の進軍です。国境地帯に近いこの町は真っ先に被害を受けますし、そういった情報に敏感なのはよくお分かりでしょう。いち早く情報を受け取った父は王様に伝令を送り、援軍の要請と避難民の生活場所の確保を求めました。今でこそ技術がこの国に入ってきていますが、当時はもっと閉鎖的な国でしたからたった2・3年で街を防衛を守ることはできません。だからこそ、軍隊を組織して間もなかった父はまず徴兵を行いました。人数が圧倒的に足りなかったのです。今の人数と同じくらいですね。相手の軍隊は10万人でした。」

「そんなにか？」

「ええ。相手方からの話ではここに姫が誘拐されたということで派遣してきました。実際に正しいことであつたんですが、それが盗賊の仕業だったのです。もちろん要請を受けて調べはしました。そんなもの出てくるわけない。なぜかという本拠地があちらの国にありました。そのことを調べたうえで危険をおかしながらも本拠地を調べ上げました。ずいぶんと味方の兵士が死にました。あざ笑うかのように姫はいませんでした。いたのは相手国の兵士500人が構えていました。父は運良く捕まりませんでした。仲間は全員捕

まりました。彼らは処刑されたそうです。父は要請したはずの味方の兵が自分たちを探していることを知りました。実際に捕まるはずの盗賊として父は濡れ衣をかぶせられました。結局、父は秘密裏に処刑されました。もちろん相手国にです。これを知った国王様は戦争を仕掛けようとしたが名分はあちらにあります。そこで考えたのが盗賊です。」

「盗賊？」

「そうです。和平を申し込んだために多額の賠償金を請求されました。」

「そういうことか……。道理でおかしいと思った。」

盗賊がいるという噂は聞いているのだが、実際にどんな被害があったのか全く聞いていないのだ。人身売買・単純に盗み被害があるということだけ。状況証拠に過ぎない。まあ、盗みのほうは本当に被害があるのだが。

「調べてみれば分かると思いますが、盗まれているのは自警団のところからです。」

「裏を返せば援助ですか……。」

「そうです。あせりましたよ。本当に捕まえにきていると知った時は。自警団で援助しなければならぬほど追いつめられましたからね。優秀な部下をお持ちなようで。」

「ありがとうございます。しかしこれは困ったな。まさか国指導でやっていたとは……。」

「そうは言っても前王が組織したものでドラゴン国王は知らないと思います。」

「どちらにしてもあなたはどうしたい？俺自身の考えもあるんだが、あなたの考えを聞いてからにしたい。この状況を作っているのはあなたが悪いくらいでもないようだ。」

「私どもはあなたの考え方を聞きたいのです。聞きたいからこそわ

わざわざ危険を冒してまでここに來たのですから。」

「俺はあなたたちに軍隊に入っていただきたいと思っている。自警団は所詮自警団でしかない。もちろん訓練をしているだろうが、軍隊とは訓練の質が違う。今、この街に必要なのは軍勢力そして、城と防壁、これがあればそう簡単には攻めてこられない。そのために城や防壁を作るのに必要なのも軍隊や労働力だ。とりあえず今必要なのはそれらの頭数がほしい。軍隊ならば皆黙って従うだろうし、街での集中発注に対しての過剰な労働需要が起こることもないからな。もちろん給料は払うし、軍隊に入りたくない人はやめてもらって構わない。そして問題の盗賊だが、この街の専属諜報部隊とする。諜報部隊にはもちろん盗賊みたいな行為も含もうとは思っていないかったが、この話を聞いたらそのほうがうまいだろうから、好きなだけやってもらう。しかし、それは城と防壁ができてからだ。いつ攻めてこられるか分からないからな。だからこそ、二つが完成してから部隊として認めることにする。それまでは今までどおりにする。俺たちが帰った後はあなたがここを納めればいい。実際に今まで統治しているようなものだから問題ないだろう。」

「あなたがここを統治するものだと思っていましたがよろしいのですか？あなたにはその権限があると思いますか？」

「どうせドラゴン様がここにとどまることを嫌うだろうよ。」

「？まあ、良いことにしましょう。これらを実行されるまで我々は監視しますよ。」

「勝手にしな。お前も働いてもらうぞ。」

「いやな予感しませんが、頑張りましょう。」

第3章第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

感想等お待ちしております

第3章外伝（前書き）

遅くなりました。

第3章外伝

自警団が軍隊へと組み込まれて1カ月が過ぎようとしていた。早い話俺がここに来て2ヶ月と少し。だいぶ仕事は落ち着いてきたが皆忙しい日々が続いていた。俺を始め、主要な役職の者は休みがない。しかし、1か月も働き詰というのはしんどいのでこちら辺で一回休息を入れようということになった。俺ならそんなことはしないんだがこの始まりは2日前にさかのぼる。

[illegible]

「オオオオオオオー」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「バックヤード！」

「ショウ。覚悟しろ。俺たちを休ませろ。さもないとここがお前の命日となる。」

『ブチッ』

実は俺も疲れがたまっていたのだ。そんな中、この仕打ち。そして直さなくてはならないだろう扉とその費用と人事の決定とその書類の作成と会計との照らし合わせ。これらをすべて俺とラリーがやっているのだ。確認の書類だけでトールたちは手いっぱいなのだ。しようがないとはいえこれは腹がたつ。

「トール。面白いことをやっているじゃないか？俺も混ぜてくれよ。」

ゆらっと俺は立ち上がった。

「くっ、ここで負けてたまるか。お前たち…。逃げたな……。裏切り者……。」

「分かっているだろうな。トール。」

「くそが……。」

トールの決起もむなしく鎮圧されたのであった。

次の日の会議で

「將軍そろそろ休みを入れてはどうか？皆疲弊しておる。こんな状態では事故が起こるかもしれないし、間違いも多くなる。それを確

認するのは將軍です。結局のところ、まわりまわりまわった所には將軍が処理しなくてはなりません。」

とイアグさん。確かにその通りです。俺は実は小心者です。よくあんな会談ができたと思っています。

「その通りです。ツールがあつた状態なのです。他のものも疲れているでしょう。週休1日ぐらい入れたほうが皆、働きますよ。ダムイ国も動くような気配がありませんし、来るべき時に備えて休ましたほうがよいと思います。軍隊のほうはそうはいきませんが……」

とラリーさん。

「俺たちは交代で休んでいるからな。まったくもって問題ない。」

とギュスターブ。

「將軍自身も休まれたほうがよいと思いますよ。」

とゴラン。

そして燃え尽きているツールがしきりにうなずいている。

「では、採決をとる。賛成の者は手を上げろ。」

満場一致で週休1日が採用された。

というわけで今日は記念すべき第1回目のお休みだ。そんな日は体

を動かすに限る。というわけで街に出ようと着替えていた。もちろん朝からだ。そして昼はどこかで食べて、夜も違うところで飯を食ってかえって来る。そうしようと思っていたんだが…。

「將軍、どこに行かれるつもりで？」

ラリーさんが後ろに。なんだ？この殺気は？

「あ、ああ…。ちょっと街を探検しようと思ってな。お金も持っているし、今日は休みにしたんだからよい。そういうことで俺は出かけてくる。」

「まさか、あの書類から逃げるわけではないですよ？」

鋭い。しかし、ここでは引けない。

「城下町に怪しげなことがないかっていう情報収集も兼ねてだよ。」
「嘘ですね。すべてを私だけにやらせよう立って、そうは問屋がよろしません。」

こうなったら逃げるしかない。

『ダダッ』

俺は駈け出した。

『バキッ』

見事な落とし穴。だれかドッキリっていう看板をくれ。

「さあ、將軍やりますよ。」

その後、俺は屍となっていた。

第3章第4話

「さて、皆集まったな。これから会議を始めます。」
ラリーが進行役なって報告を始めた。

「まず最初に防壁の途中経過を報告したいと思います。ではツールをお願いします。」

「はい。今のところ將軍が言われたとおり、前のほうから順番に進めています。半分まで終わった所です。今、現段階で職人にしかできない城門を作らせています。この調子でいきますと1ヶ月後にはできる予定となっております。」

「次に城の建設についての内容ですが…」

ラリーは図面を見せる。

「「？」」

「このようになっております。この城は階数は2回までになっておりまして、単純に言ってしまえば横に広い形となっております。理由といたしましては避難民を逃がすために城を通して逃がすこともに広いことにより弓矢兵など間接攻撃を有効的に充てることができます。城を横に大きくすることで街の後ろをすべて対応することができます。そして、ここの一階で大規模な訓練を行います。ゴランをお願いします。」

「すべての隊で基礎体力がなさすぎます。少し走っただけで息が上がっております。ということで大変だとは思いますが、ここで500人ずつ公開筋肉運動を行います。腕立て伏せ、背筋、腹筋、そして腿上げを延々とやっただきます。そして10000人の兵士を街の警護にして、1000人は將軍の警護、それ以外はとりあえず走っていただきます。」

「走るとは？」

「首都まで走ってもらいます。」

「なるほど。遠征練習も兼ねているんですね。」

「はい、もちろん武器もすべて携帯していただきます。筋肉運動組は3日おきに代わってもらいます。まあ、これで何とかなるでしょう。」

「「「……………」」」」

皆、ぞっとするような顔をしている。当然だ。一日おきならともかく三日連続というのはきつい。しかもこれから王都まで往復6日だ。これは偶然ではなく故意であろうと思われる。1か月で軍隊が壊滅しなければいいが…。

「そうですね…、一応これで詳細の部分は置いておきまして全部となるんですが、何か質問がある方はいますか？」

「はい。」

「將軍どうぞ。」

「城の後ろに門はつけるよな？」

「はい。簡易的なものにしようかと…。」

「いやいや…それじゃあ、避難する時人が混雑するだろう。簡易的な門でも広い門にしろ。」

「分かりました。そうしましょう。」

「他に質問があるか？」

皆、ないようだな。

「では、次の議題に移ります。」

内容はここ最近のダムイ国の状況です。今回の戦いでは捕虜となっている方がたくさんいらっしゃいます。もちろん、今はシヨウ將軍の部下になっているわけですがまず間違いなく使者が来ます。その

時がいつになるかわかりませんが、そのタイミングによってまずいことになることもあり得ます。」

「それは？」

「城の建設です。」

「しかし、ここは昔から治安の悪いことがはっきりとしているから大丈夫だろうか？」

「それはあくまで客観的な見方でしかありません。相手の国からみると戦略的に城を作ったと言われかねませんし、何よりも自分たちがなんの理由もなしに攻めようとしていると各国に思われるという思惑があります。」

「ふむ、そう言われればそうだが意思表示が難しいところが問題だな。」

「そうです。部下にしているということ自体がありえないと言われれば否定ができません。問題はまだありますね？ トール。」

「……………」

「トール、何かは分かんが問題になってからでは遅い。今ここで言え。」

「……はい。実は先日、將軍からの要請の通り私の家族がここに引っ越してきたのです。」

「なんだ。そんなことか息子思いの言い家族じゃないか。」

「もちろん、そこが問題なわけではないのです。お恥ずかしい話、私は家族がやっている商売のことなんか全く知らなく、手伝いもせずに文官に採用されるために勉強してきました。今回、引っ越しをしてきた家族を見ると明らかに家族ではない量の人が来ました。私は国相手に下請けを頼まれていると思ったのですが…、10年も前に方向転換をして今では民間の中の受注、野菜の販売、金貸し、軍事物資の輸入をやっています。他にもやっているところはあるみたいなのですが、信頼と実績があるのはうちが上から数えて2番目らしいのです。しかも、弟が新しく宿屋を始めたらしくそっちもこちらに移転してこようかとしています。単純に3人だけが来れば問題

ないのですが、雇用者もこちらに来てやりたいということになり、1000人から2000人の方々が移住してくると考えられます。今は300人程度ですがまだ増えます。弟のほうは500人がこちらの手続きを受ける手配をしているようです。」

なんでそうなるんだ？

第3章第5話

「さて、困ったな。捕虜という形を含めて考えたら、はつきり言う
と人質を取って脅しているというのが普通の考え方だ。すまないが
ギュスターブお前の家族が危険になるかもしれないが、どうする？」

「いや、何とも言えない。その策とやらを聞かせてもらえるか？」

「策というほどでもないのだが…。まず最初にお前たちが俺に忠
誠を誓ったことを宣言する。理由としてはお前たちが捕虜であると
いうことを覆すためだ。このままだと完全に国同士の戦争に発展す
る。だからこそ、捕虜ではなく俺の部下だと示すことで人質によっ
て家族を連れてくるように仕向けたことを選択肢の一つから外すこ
とだ。もちろん相手がそれ自体が脅しだと言ったらしょうがないこ
とではあるが…。」

次に相手国に侵入し、ギュスターブの母と妹を助ける。」

「お前、俺に妹がいることを知っていたのか？」

「もちろんだ。今、有名ないいじゃないか？政治に通じていて、宰
相と熱弁をしたらしいな。ずいぶんとキレ者なようだ。」

「しかし、将軍この作戦は危険が多すぎます。ギュスターブの母君
は今、王宮の別室で完全に隔離しているとの噂です。これはがせか
もしれませんがダムイ国は伝説の傭兵ともいわれる「蒼き影」を雇
っているとのことですよ。」

「それは一体誰だ？」

「ほとんど分かってはいないのですが、彼に見つめられると殺気で
体が凍ってしまい、姿を見られることなく殺すとのことからこの名
前がつかまりました。本名を知っているものはいないともいわれ、傭兵
所でもこの名で登録されているそうです。彼は傭兵の中でも破格で
す。この作戦は彼がいる限り、難しい。」

「そうかもしれないな。だが、やるしかない。今のままでは圧倒的
に俺たちが不利だ。このまま戦争になれば負けるのは俺達であり、

搾取されるのはこの住民たちだ。だとすれば少ない可能性に賭けるしかない。とは言ってもダムイ国が戦争の準備・出兵の兆しを見せてからだ。それからでも十分に遅くないと考えられる。この兵隊は26000人。相手はそれを上回る軍で来なくてはならないのだから、どう考えても準備に1カ月と半月ぐらいはかかるだろう。その間に俺たちも相手の情報の収集と城壁、城門、城の建設を最優先とすることにする。今回ゴランが建ててくれた訓練の案は一時保留しよう。俺の考えは走る訓練は今のままでいいとして、筋肉運動組は建設組と変えることにする。石を運ぶんだから筋肉運動にはなるだろう。」

「では、将軍、最低限の兵だけ残して建設組とすればよいのでは？」
「トール、すべての人間がお前みたいにくさんの仕事をできるわけではないんだ。それに職人たちの人数は限られている。労働者ばかりいても働く仕事がなくては意味がないだろう？ くさんの人数はかえって邪魔になるだけだ。」

「それもそうですね。」

「これからは、時間だけではなくダムイ国の状況も考えなくてはならない。分かっているとは思うが、時間ばかりを気にして俺たちがあせっては意味がない。それを皆、心得るように。」

「「はっ！」」

「では、会議を終了する。ゴランとラリーは残れ。話がある。」

ゴランとラリー以外は全員出て行った。

第3章外伝2

「さて、揃ったようだな。」

6人。

「ゴラン・ラリー・ルカイ・アシュ・スナイ・ミリア、この6人によって秘密諜報部隊『ダーク』を作る。相手はもちろん見えない敵だ。それこそがこれから重要になる。皆分かってるだろうが、王族の死には闇討ち・毒殺・誘拐そういったものが多いのは事実だ。とすれば、確実に能力のあるものはこの脅威に怯えなくてはならなくなる。それではいい政治もできないし、貴族ばかりが台頭してしまう原因になってしまった。俺たちはそれを阻止するために組織する。」

「「「「「はっ」「」「」「」」」」」

「各個人に200人つける。この1カ月で完ぺきに仕上げて見せろ。」

第3章外伝2（後書き）

すみません。短くて…

第3章終話

「將軍、ついにダムイ国が動く模様です。」

「分かった。いつものメンバーを呼べ。」

「もう揃っております。みなさん、なぜか情報が早いようで…。」

「そうか、皆気になっていたのだろうな。さあ、行こう。」

「皆、遅くなつてすまない。では、始めることにしよう。しかし、報告したいことがある。それは援軍についてだ。今回は間に合わないかもしれないが、一応要請はしておいた。そして、各領主にも警戒をするように注意を促した。」

「妥当ですね。しかし、それでは勝てないかもしれません。」

「相手軍はどれほどいるんだ？」

「13万人です。」

「頭痛いー。」

「將軍、さすがに貫禄がありません。」

「よし、まずどうするか？」

「住民の避難がまず最優先かと…。」

「20万人をどうするかだな。」

「失礼します。アンケートをとってきました。」

「ああ、ゴランよくやった。どうだった？」

「ほとんどの住民が逃げないようです。皆、ここで生活するのが気に入っているようです…。」

「そうか…、あまりいい状況ではないな。実際には人数が足りないのだからどうしようもないが、住民たちの意見を聞くと…。」

「邪魔なだけのような気がするがな。確かに頭数だけは揃うかもしれないがまったくもって、役に立たないと思う。」

「そうだな、今から訓練しても駄目だしな…。」

「私から言わせていただきますと普通の住人とは違います。みなさん見て分かったと思いますがこの家には防犯よけや意識が高いです。普通の人たちとは違うことをここに明言させていただきます。」

「申し上げます。」

「入ってこい。ドラゴン国王より書簡が届いております。」

「分かった。ここに…。」

「失礼します。」

「將軍何と書かれておりますか？」

「援軍は送れないとよ…。」

「そうですか…。」

「何を落ち着いているのです？住民が死ぬかもしれないんですよ？それなのにドラゴン国王は…。」

「そうです。ゴラン殿、落ち着いている場合ではありません。早く対策を建てないと…。」

「確かにここで援軍を送らないのはおかしいですね…。ここをとられればやばいのは目に見えてます。」

「しかし、落ち着くのが大事なのはここにいる人たちは分かっているはずだ。」

『全員黙れ！！！！』

「ここで皆が争っていてもはじまらない。会議は明日に延期する。それぞれが作戦を考えろ。解散にする。」

新たな始まり

「首尾はどうだ？」

「芳しくありません。」

「気づかれたか？」

「おそらく：ギュスターブが気づいている可能性が…、トールも危険です。」

「すまないが、手を回すしかない。有能な人間であるのだろうか？」

「ええ、しかししないことはないです。彼らは一つの能力が秀でているだけです。次の人選もすぐに決まります。いざとなれば我々6人の中から出せばよいことです。」

「彼女は気づいているのか俺たちの作戦に？」

「いえ、我々から

彼は出て行った。

「君は俺たちのために国ごとつぶさなくてはならない。悪いが死んでもらう。」

彼は月を見ながらそう言った。

新たな始まり（後書き）

これで第1節は終わりとなりました。

どうだったでしょうか？

お付き合いいただきありがとうございました。

今度は第2節として書きます。

感想等お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4350/>

大切なもの～第1節～

2010年10月17日18時07分発行